

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第99集

なか みち
中 道 遺 跡 II

長野県佐久市大字前山中道遺跡II発掘調査報告書

2002.3

佐 久 市
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第99集

なか みち
中 道 遺 跡 II

長野県佐久市大字前山中道遺跡II発掘調査報告書

2002.3

佐 久 市
佐久市教育委員会



写1 中道遺跡Ⅱ周辺航空写真(垂直)



写2 中道遺跡Ⅱ周辺写真（南から）



写3 中道遺跡Ⅱ航空写真（北から） H9年度調査区



写4 H7号住居址遺物出土狀況



写5 H15号住居址遺物出土狀況



写6 H 7号住居址出土遺物



写7 H 15号住居址出土遺物

例 言

1. 本書は平成9年度から行われた佐久市による公営住宅建設事業、泉団地建替工事に伴う発掘調査報告書である。
2. 調査委託者 平成9年度 佐久市建築課、平成11・13年度 佐久市都市計画課
3. 調査受託者 佐久市教育委員会
4. 遺 跡 名 中道遺跡Ⅱ (NAⅡ)
5. 所 在 地 佐久市大字前山106-5.113-1.113-2.113-6.113-8.113-9.113-10.113-11.113-12.113-13.114-2.114-4.114-6.114-7.115-2.115-3.115-4.152-3.152-5.153-1.153-6.153-8.153-9
6. 調査年度及び調査面積 平成9年度 1,280㎡ 平成11年度 1,200㎡ 平成13年度 560㎡
7. 調査担当者 平成9年度調査(現場) 富沢 一明
平成11・13年度調査(現場) 上原 学
8. 本書の執筆・編集は上原が行った。
9. 本書及び出土品は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

1. 遺構の略号は以下のとおりである。

H-竪穴住居址 M-溝状遺構 D-土坑 P-ピット

2. スクリーントーンによる表示は以下のとおりである。

遺 構

地山断面  焼 土  床 下  炭範囲 

遺 物

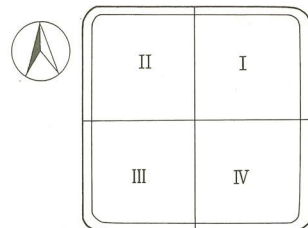
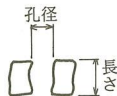
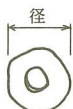
須恵器断面  黒色処理  石器使用面  赤色塗彩 

3. 挿図縮尺は以下のとおりである。

遺 構 竪穴住居址-1/80 溝状遺構-1/100 ピット-1/80 土坑-1/60

遺 物 土師器・須恵器-1/4 石類-1/3、2/3 玉類-1/1

4. 写真図版の遺物番号と遺構の実測番号は同一である。
5. 遺構の標高は各遺構ごとに統一し、水糸高を標高とした。
6. 土層・遺物の色調は「新版 標準土色帖」による。
7. 調査グリッドは4×4mである。
8. 住居址の区割りは上を北とし、北東隅から逆時計回りである。
9. 玉類の計測は図のとおりである。



目 次

例言・凡例

目次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 立地と経過	1
第2節 調査体制	2
第3節 遺跡の概要	2

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 自然環境	4
第2節 周辺遺跡	5
第3節 基本層序	7

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

H 1号住居址	9	H 2号住居址	10
H 3号住居址	12	H 4号住居址	14
H 5号住居址	15	H 6号住居址	16
H 7号住居址	18	H 8号住居址	21
H 9号住居址	25	H10号住居址	26
H11号住居址	28	H12号住居址	30
H13号住居址	31	H14号住居址	32
H15号住居址	32	H16号住居址	35
H17号住居址	36		

第2節 溝状遺構 M1～M2 37

第3節 土坑 D1～D4 39

第4節 ピット群 1群～5群 40

第5節 遺構外遺物 41

まとめ 44

図 版

第1図 中道遺跡Ⅱ位置図 (1:100,000) ……………1	第26図 H8号住居址遺物実測図 (2)……………23
第2図 中道遺跡Ⅱ位置図 (1:10,000)……………5	第27図 H8号住居址遺物実測図 (3)……………24
第3図 中道遺跡Ⅱ周辺遺跡図 (1:50,000)……………7	第28図 H9号住居址・遺物実測図 ……………25
第4図 基本層序模式図 ……………7	第29図 H10号住居址実測図 ……………26
第5図 中道遺跡Ⅱ遺構配置図 (1:600)……………8	第30図 H10号住居址遺物実測図 (1)……………27
第6図 H1号住居址実測図 ……………9	第31図 H10号住居址遺物実測図 (2)……………28
第7図 H1号住居址遺物実測図 ……………10	第32図 H11号住居址実測図 ……………29
第8図 H2号住居址実測図 ……………11	第33図 H11号住居址遺物実測図 ……………29
第9図 H2号住居址遺物実測図 ……………11	第34図 H12号住居址・遺物実測図 ……………30
第10図 H3号住居址実測図 ……………12	第35図 H13号住居址・遺物実測図 ……………31
第11図 H3号住居址遺物実測図 (1)……………12	第36図 H14号住居址・遺物実測図 ……………32
第12図 H3号住居址遺物実測図 (2)……………13	第37図 H15号住居址実測図 ……………33
第13図 H4号住居址実測図 ……………14	第38図 H15号住居址遺物実測図 ……………34
第14図 H4号住居址遺物実測図 ……………15	第39図 H16号住居址・遺物実測図 ……………35
第15図 H5号住居址実測図 ……………15	第40図 H17号住居址・遺物実測図 ……………36
第16図 H5号住居址遺物実測図 ……………16	第41図 M1・2号溝状遺構実測図 ……………37
第17図 H6号住居址実測図 ……………17	第42図 M1号溝状遺構遺物実測図 (1)……………37
第18図 H6号住居址遺物実測図 ……………17	第43図 M1号溝状遺構遺物実測図 (2)……………38
第19図 H7号住居址実測図 (1)……………18	第44図 M2号溝状遺構遺物実測図 ……………39
第20図 H7号住居址実測図 (2)……………19	第45図 土坑実測図 ……………39
第21図 H7号住居址遺物実測図 (1)……………19	第46図 ピット群実測図 ……………40
第22図 H7号住居址遺物実測図 (2)……………20	第47図 遺構外遺物実測図 (1)……………41
第23図 H8号住居址実測図 ……………21	第48図 遺構外遺物実測図 (2)……………42
第24図 H8号住居址掘方実測図 ……………22	第49図 遺構外遺物実測図 (3)……………43
第25図 H8号住居址遺物実測図 (1)……………22	第50図 中道遺跡Ⅱ土器編年表 (古墳時代)……………45

表 目 次

第1表 中道遺跡Ⅱ周辺遺跡表 ……………6	第7表 H3号住居址石類観察表 ……………14
第2表 H1号住居址遺物観察表 ……………10	第8表 H4号住居址遺物観察表 ……………15
第3表 H1号住居址石類観察表 ……………10	第9表 H4号住居址石類観察表 ……………15
第4表 H2号住居址遺物観察表 ……………11	第10表 H5号住居址遺物観察表 ……………16
第5表 H2号住居址石類観察表 ……………11	第11表 H6号住居址遺物観察表 ……………18
第6表 H3号住居址遺物観察表 ……………13	第12表 H6号住居址石類観察表 ……………18

第13表	H 7号住居址遺物観察表	20	第26表	H14号住居址遺物観察表	32
第14表	H 7号住居址石類観察表	20	第27表	H15号住居址遺物観察表	35
第15表	H 7号住居址玉類観察表	21	第28表	H15号住居址石類観察表	35
第16表	H 8号住居址遺物観察表	24	第29表	H16号住居址遺物観察表	36
第17表	H 8号住居址石類観察表	25	第30表	H17号住居址遺物観察表	36
第18表	H 9号住居址遺物観察表	26	第31表	M 1号溝状遺構遺物観察表	38
第19表	H10号住居址遺物観察表	28	第32表	M 1号溝状遺構石類観察表	38
第20表	H10号住居址石類観察表	28	第33表	M 1号溝状遺構玉類観察表	38
第21表	H10号住居址玉類観察表	28	第34表	M 2号溝状遺構遺物観察表	39
第22表	H11号住居址遺物観察表	29	第35表	M 2号溝状遺構石類観察表	39
第23表	H11号住居址石類観察表	30	第36表	土坑観察表	39
第24表	H12号住居址遺物観察表	31	第37表	遺構外遺物観察表	43
第25表	H13号住居址遺物観察表	31	第38表	遺構外石類観察表	44

写真図版

巻頭カラー

写 1	中道遺跡Ⅱ周辺航空写真（垂直）	写 5	H15号住居址遺物出土状況
写 2	中道遺跡Ⅱ周辺写真（南から）	写 6	H 7号住居址出土遺物
写 3	中道遺跡Ⅱ航空写真（北から）H 9年度調査区	写 7	H15号住居址出土遺物
写 4	H 7号住居址遺物出土状況		

本文中

調査風景（西から）H 9年度調査区	3	佐久平周辺航空写真（南から）	4
-------------------	---	----------------	---

写真図版

図版 1	中道遺跡Ⅱ遠景（西から）	H11年度調査風景
	中道遺跡Ⅱ全景（南から）H 9年度調査区	H11年度調査風景
		H13年度調査風景
図版 2	中道遺跡Ⅱ近景（西から）H 9年度調査区	
	中道遺跡Ⅱ全景（垂直）H 9年度調査区	図版 5
		H 1号住居址全景（西から）
		H 1号住居址カマド（西から）
図版 3	中道遺跡Ⅱ全景（南東から）H11年度調査区	H 1号住居址掘方（西から）
	中道遺跡Ⅱ全景（南から）H13年度調査区	H 2号住居址全景（南から）
		H 2号住居址掘方（南から）
図版 4	H 9年度調査風景	
	H 9年度調査風景	図版 6
		H 3号住居址全景（南から）

- H 3号住居址遺物出土状況
H 3号住居址掘方（南から）
H 4号住居址全景（南から）
H 4号住居址カマド（南から）
- 図版7 H 4号住居址カマド掘方（南から）
H 4号住居址掘方（南から）
H 5号住居址全景（南から）H9年度調査分
H 5号住居址掘方（南から）H9年度調査分
H 5号住居址全景（東から）H11年度調査分
H 5号住居址掘方（西から）H11年度調査分
- 図版8 H 6号住居址全景（南から）
H 6号住居址遺物出土状況
H 6号住居址カマド（南から）
H 6号住居址掘方（南から）
H 7号住居址全景（南から）
- 図版9 H 7号住居址カマド（南から）
H 7号住居址遺物出土状況（1）
H 7号住居址遺物出土状況（2）
H 7号住居址遺物出土状況（3）
H 7号住居址遺物出土状況（4）
- 図版10 H 7号住居址遺物出土状況（5）
H 7号住居址掘方（南から）
H 8号住居址全景（南から）
H 8号住居址カマド（南から）
H 8号住居址掘方（南から）
- 図版11 H 9号住居址全景（南から）
H 9号住居址掘方（南から）
H10号住居址全景（西から）
H10号住居址カマド（西から）
H10号住居址遺物出土状況
- 図版12 H10号住居址遠景（西から）
H10号住居址掘方（西から）
- H11号住居址全景（南から）
H11号住居址カマド（南から）
H11号住居址掘方（南から）
- 図版13 H12号住居址全景（南から）
H12号住居址カマド（南から）
H12号住居址掘方（南から）
H13号住居址全景（西から）H11年度調査分
H13号住居址全景（南西から）H13年度調査分
- 図版14 H13号住居址カマド（南から）
H13号住居址カマド（東から）
H13号住居址カマド掘方（南から）
H13号住居址掘方（北西から）H11年度調査分
H13号住居址掘方（南から）H13年度調査分
- 図版15 H14号住居址全景（北西から）
H14号住居址掘方（北から）
H15号住居址確認状況（北西から）
H15号住居址全景（南東から）
H15号住居址全景（南西から）
- 図版16 H15号住居址カマド（西から）
H15号住居址カマド（東から）
H15号住居址遺物出土状況（1）
H15号住居址遺物出土状況（2）
H15号住居址カマド西側土坑
H15号住居址カマド掘方（東から）
H15号住居址カマド掘方（南から）
H15号住居址掘方（南西から）
- 図版17 H16号住居址全景（西から）
H16号住居址遺物出土状況（1）
H16号住居址遺物出土状況（2）
H16号住居址遺物出土状況（3）
H16号住居址掘方（北から）
- 図版18 H17号住居址全景（南から）

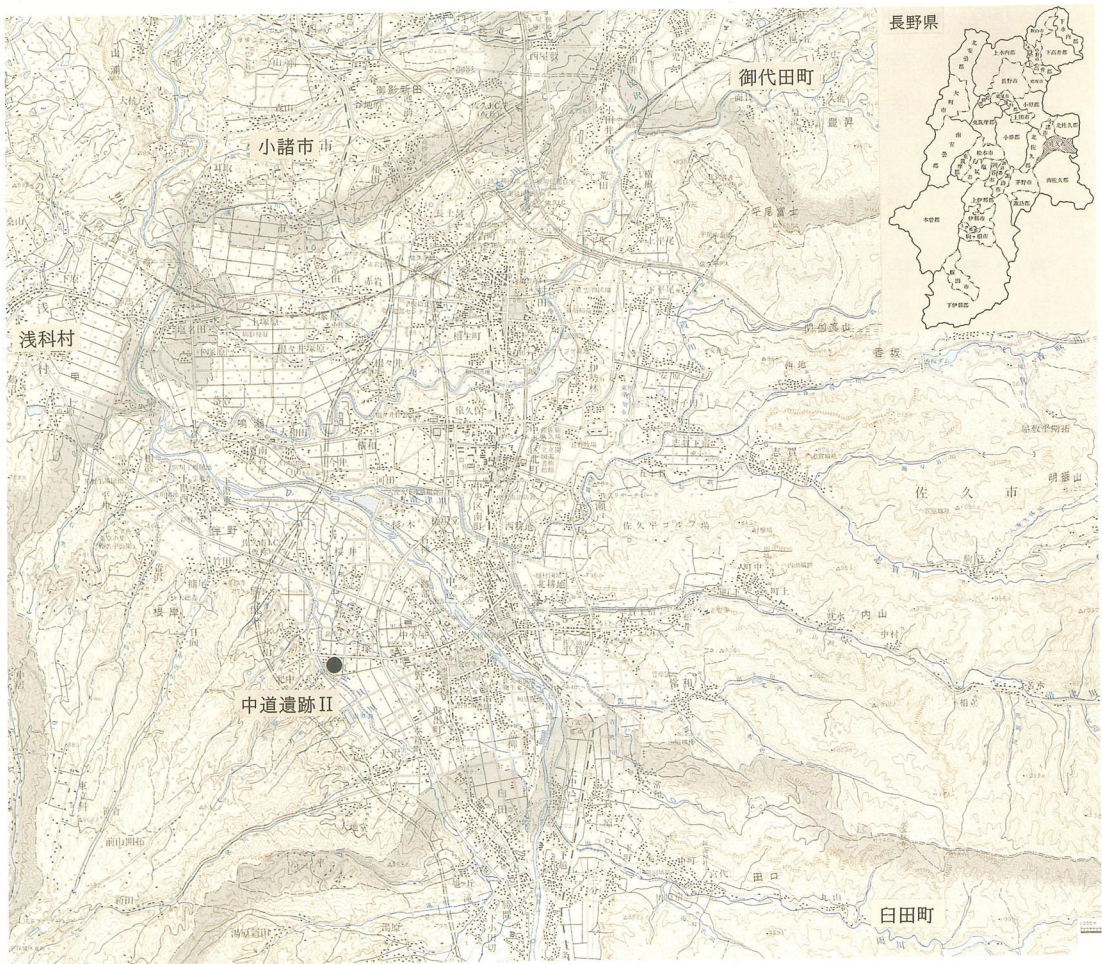
- M1・2号溝状遺構全景（北西から）
- 図版19 M1・2号溝状遺構全景（北から）
M1・2号溝状遺構全景（南から）
- 図版20 D1号土坑全景
D2号土坑全景
- 図版21 D3号土坑全景
D4号土坑全景
- 図版22 ピット群1全景（東から）
ピット群5全景（北西から）
- 図版23 H1・2号住居址遺物
- 図版24 H3号住居址遺物
- 図版25 H3・4・5号住居址遺物
- 図版26 H5・6・7号住居址遺物
- 図版27 H7号住居址遺物
- 図版28 H8号住居址遺物
- 図版29 H8号住居址遺物
- 図版30 H8・9・10号住居址遺物
- 図版31 H10・11号住居址遺物
- 図版32 H12・13・14・15号住居址遺物
- 図版33 H15号住居址遺物
- 図版34 H16・17号住居址、M1号溝状遺構遺物
- 図版35 M1号溝状遺構遺物
- 図版36 M1・2号溝状遺構、遺構外遺物
- 図版37 遺構外遺物
- 図版38 遺構外遺物
- 図版39 遺構外遺物
- 図版40 遺構外遺物

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 立地と経過

中道遺跡は大字前山に所在し、野沢平西方の千曲川と片貝川に挟まれた沖積低地に立地する。標高は670m内外を測る。遺跡内では昭和46年の発掘調査により、古代の竪穴住居址が検出され土師器・須恵器の他奈良三彩の蓋などが出土している。また遺跡の北300mに所在する三千東遺跡群の南東端では平成6年に寺添遺跡の調査が行われ、古墳・奈良時代の竪穴住居址などが29軒検出され、土師器・須恵器・白玉といった遺物が出土している。

今回、佐久市による公営住宅建て替え工事が行われることとなり、遺構の確認調査を実施した結果、古代の竪穴住居址などが認められたことから、佐久市教育委員会が主体となり、遺構の記録保存を目的として発掘調査を行う運びとなった。なお、発掘調査は建て替え工事計画に合わせ、平成9・11・13年の3回行われた。



第 1 図 中道遺跡 II 位置図 (1 : 100,000)

第2節 調査体制

平成9年度

教 育 長 依田 英夫
教 育 次 長 市川 源
埋蔵文化財課長 須江 仁胤
管 理 係 長 榎沢 慶子
埋蔵文化財係長 大塚 達夫
埋蔵文化財係 林 幸彦 三石 宗一 須藤 隆司 小林 眞寿 羽毛田 卓也
富沢 一明 上原 学
調 査 主 任 佐々木 宗昭 森泉 かよ子

平成11年度

教 育 長 依田 英夫
教 育 次 長 小林 宏造
文化財課長 草間 芳行
文化財係長 萩原 一馬
文化財係 林 幸彦 須藤 隆司 小林 眞寿 羽毛田 卓也 富沢 一明
上原 学 山本 秀典 出澤 力
調 査 主 任 佐々木 宗昭 森泉 かよ子

平成13年度

教 育 長 依田 英夫 (4～6月) 高柳 勉 (7月～)
教 育 次 長 小林 宏造 (4～5月) 黒沢 俊彦 (5月～)
文化財課長 草間 芳行
文化財係長 萩原 一馬 (4～5月) 森角 吉晴 (5月～)
文化財係 林 幸彦 須藤 隆司 小林 眞寿 羽毛田 卓也 富沢 一明
上原 学 山本 秀典 出澤 力
調 査 主 任 佐々木 宗昭 森泉 かよ子

平成9・11・13年度

調 査 員 岩崎 重子、岩下 吉代、岩下 友子、岩下 文子、上原 芳男、
碓氷 知子、大井みつる、小幡 弘子、柏木 義雄、金森 治代、
小林よしみ、佐々木 正、佐々木久子、佐藤志げ子、佐藤 剛、
関口 正、田中 章雄、中島とも子、中條 悦子、成澤 富子、
林 幸男、比田井久美子、堀籠 因、武者 幸彦、桃井もとめ、
山村 容子、若林 希、渡邊 久美子、渡辺 倍男、

第3節 遺跡の概要

遺 跡 名 中道遺跡Ⅱ (NAⅡ)

所在地 佐久市大字前山字中道113-1他23筆

調査期間 平成9年8月25日～10月3日（現場）
平成11年7月30日～8月11日（現場）
平成13年4月3日～4月20日（現場）
平成9年10月3日～平成14年3月29日（整理）

調査面積 1,280m²(平成9年度) 1,200m² (平成11年度) 560m² (平成13年度)

調査遺構 竪穴住居址 古墳時代 10軒 古墳時代以降 4軒 不明 2軒 弥生時代 1軒
土坑 4基
溝状遺構 2条
ピット

出土遺物 土師器（坏・甕・鉢・高坏・甑）
須恵器（甕・坏・高坏・壺・横瓶・臙）
弥生式土器（甕・壺）
石類（石包丁・紡錘車・打製石斧・擦り石・砥石・台石・剥片・磨き石）
玉類（白玉）
古銭（祥符元寶・聖宋元寶）
縄文土器片



調査風景（西から） H9年度調査区

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 自然環境

佐久地域は、周囲を山地・台地に囲まれた盆地状を呈し、一般に佐久平と呼ばれ、北方には現在も活動を続け白煙を立ちのぼらせる浅間山、南方に蓼科山が存在する。東方には北関東山地の北端がのび、群馬県との境をなしている。西方には御牧原・八重原といった台地が広がり、蓼科西端の裾野と接している。そしてこの佐久平を大きく二分するかのように一級河川である千曲川が南方の南佐久方面から沢筋の支流を集めながら水量を増しつつ佐久市内に流れ込む。市内にはいると、野沢付近まで北流した川筋をやや北西方向に変え、蓼科山麓の支流を集めた片貝川、浅間山の東麓に源を発す湯川、関東山地からの支流である田子川、志賀川などを集めた滑津川といった河川と合流し市街へと至る。

また佐久地域は地質学的にも南北で大別でき、この境界は、佐久平のほぼ中央である志賀川が滑津川と合流して千曲川に注ぐ東西線を境として、河川の北側段丘上は680m、南側は650mを測り、30m内外の比高差の断崖を認めることができる。北部地域は、北の浅間山の山麓末端部の平坦な台地で、浅間山の噴火によって台地表面に堆積した軽石流は、雨水による浸食に弱く、長い年月の間に深く削りとられ、浅間山の麓から放射状に幾筋にも浸食谷（田切り地形）を形成し、切り立った断崖により台地を細長く分断している。

これに対し、南部地域は千曲川の氾濫源沖積地と滑津川の谷口扇状地で、河床礫層と沖積粘土層地帯で地下水位も高く、安定した土地である。このため南部一帯は広く水田として利用されていた。

今回調査対象となった中道遺跡は、佐久平南部の千曲川と片貝川に挟まれた標高670m内外の氾濫源沖積地上に展開し、周辺は現在も広く水田として利用されている。

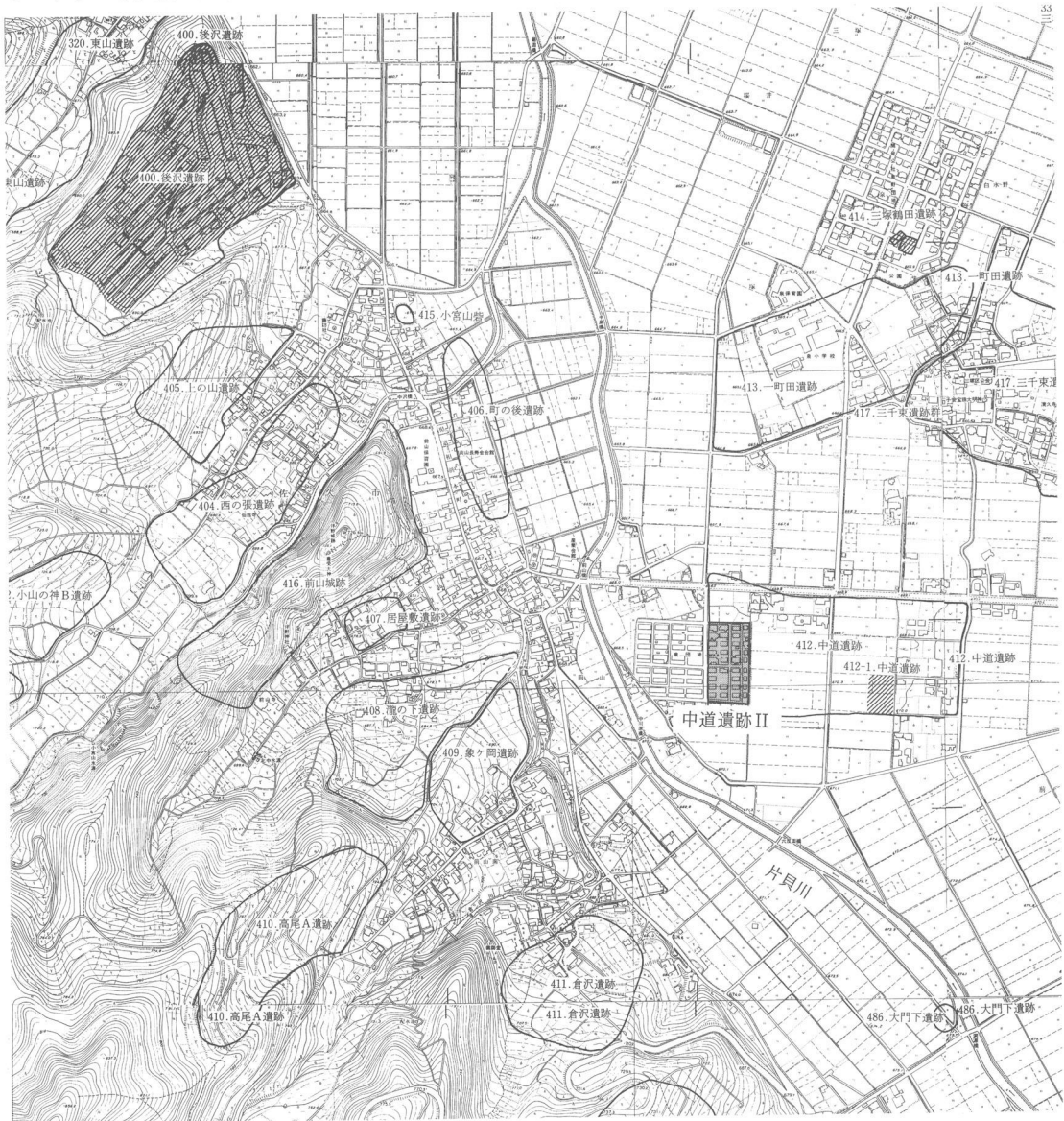


佐久平周辺航空写真（南から）

第2節 周辺遺跡

中道遺跡は佐久市南部の千曲川と片貝川に挟まれた標高670m内外の氾濫源沖積地上に展開し、西方には蓼科山の裾野がのび、この一帯には先土器時代から中世に至る遺跡が存在し、多くの発掘調査が行われている。これらの遺跡を時代別に概観したい。

まず、先土器時代の遺跡としては、当遺跡南西方向6 km の山麓中に立科F遺跡がある。調査によって211点からなる石器群が検出され、検出層位から31200±900年前の年代が与えられている。続く縄文時代の遺跡としては、前期前半の住居址6軒が調査された後沢遺跡、中期後半の住居址16軒が調査された中村遺跡、筒村B・山法師B遺跡などがある。また、前山地籍の瀧の下遺跡からは、後期の敷石住居址2軒が検出され、そのうち1号住居址の敷石は炉の周辺に菱形に敷かれていた。周辺地域の縄文時代の遺跡は、その多くが山



第2図 中道遺跡Ⅱ位置図 (1:10,000)

地沿いの谷間か水田面に接する山裾周辺に広がっており、沖積低地での集落址は未だ発見されていない。

次に弥生時代の遺跡としては、水田面を見下ろす丘陵上に位置する後沢遺跡で中期栗林期3軒、後期箱清水期32軒の住居址、方形周溝墓3基が調査されている。また、同じ様な地形にある西裏・竹田峯遺跡からは中期栗林期9軒、後期箱清水期5軒の住居址とともに、後期に比定される壺棺が検出され、壺内より胎児骨一体と管玉・ガラス小玉が発見された。

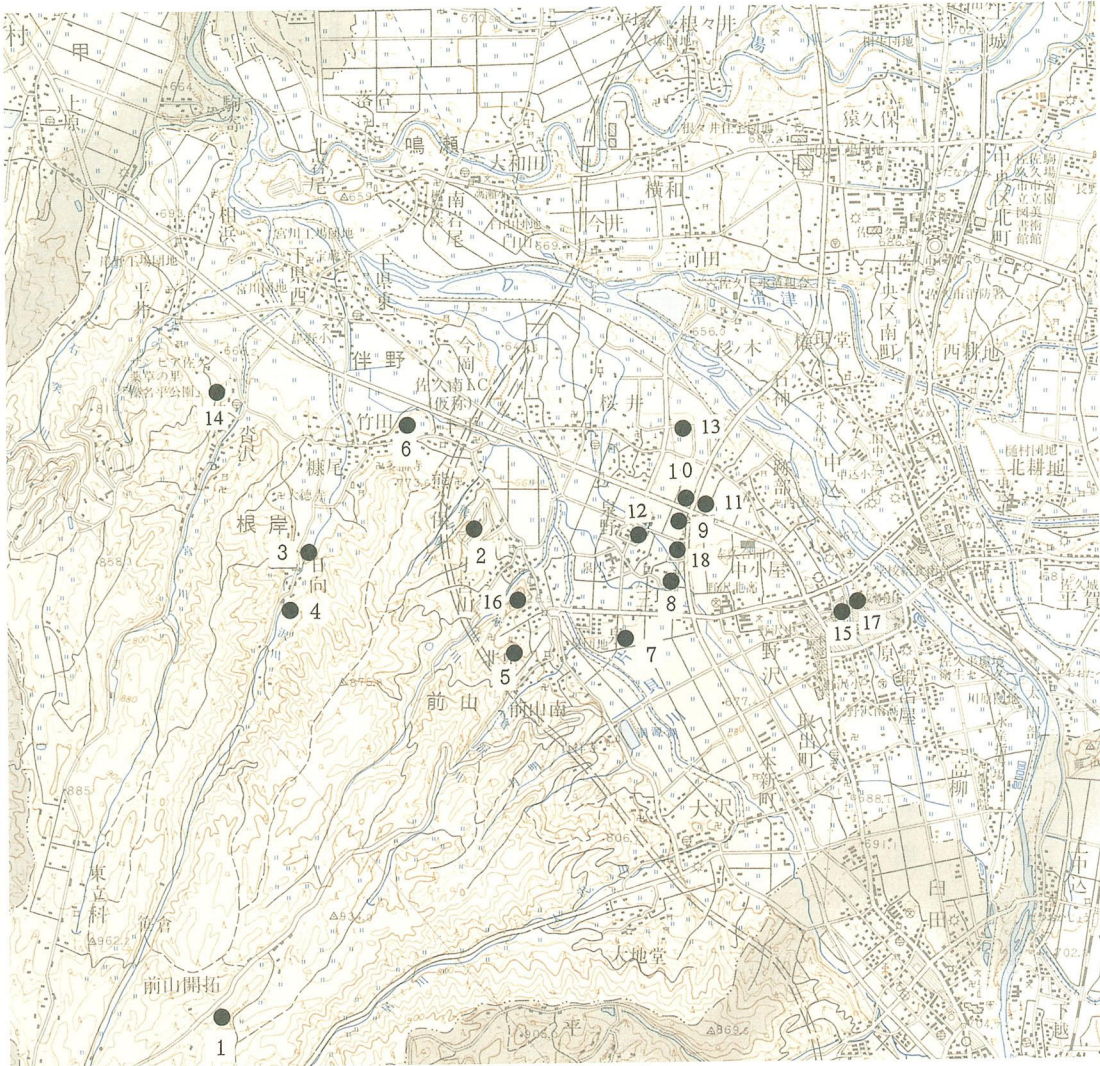
古墳時代になると遺跡は沖積低地まで広がり始める。圃場整備などで調査された遺跡も多く、本遺跡を始め、寺添遺跡、市道遺跡、三塚町田遺跡、跡部町田遺跡、三塚鶴田遺跡、上桜井北遺跡などが上げられる。これらの遺跡はいずれも自然堤防上や微高地上に立地しており、中期後半から後期に及ぶ集落である。古墳址は調査されたものは少なく、根岸地籍の榛名平・坪の内遺跡で後期から終末期に属する横穴式石室の古墳址が1基と坪の内古墳が調査されたにとどまっている。なお佐久平においては、千曲川左岸の低地や山地には古墳址が少なく、千曲川右岸の山裾には群集墳が集中して存在する極めて対照的な様相を示している。

奈良・平安時代は前代と同様な様相を示し、低地と山裾に小規模な集落址が確認されている。しかし、調査された遺跡範囲がいずれも小規模である為、今後、長土呂地籍の聖原遺跡の様な大規模な集落址が発見される可能性はある。また、以前行われた中道遺跡及び榛名平遺跡からは奈良三彩の蓋が出土しており注目される。鎌倉時代以降になると伴野氏の活躍が始まる。方形の区画を持つ野沢館跡や山城として良好な保存状態を保つ前山城跡は伴野氏によって築かれたものとされ、「一遍上人絵伝」にも当時の伴野氏館の活況な様子が描かれている。榛名平遺跡からは中世後期と考えられる土壙墓・火葬墓といった墳墓群が検出されている。近年では薬師寺本堂改築に伴う薬師寺遺跡の調査が行われ、近世中期から近現代の遺物が出土している。

(佐久市埋蔵文化財調査報告書 第44集 寺添遺跡 歴史的環境 一部改訂)

No	遺跡名	所在地	立地	旧	縄	弥	古	歴	中	近	備考
1	立科F遺跡	前山字立科	山地	○							平成2年調査
2	後沢遺跡	小宮山字後沢	丘陵		○	○	○	○			昭和51・52年調査
3	中村遺跡	根岸字日向	山地		○						昭和57年調査
4	筒村B・山法師B遺跡	根岸字日向	山地		○				○		平成3・4年調査
5	瀧の下遺跡	前山字滝の下	丘陵		○						平成2年調査
6	西裏・竹田峯遺跡	根岸字西浦・竹田峯	丘陵先端			○	○	○			昭和60年調査
7	中道遺跡	前山字中道	沖積、微高地			○	○	○			昭和46年調査
8	寺添遺跡	三塚字寺添	〃				○	○			平成6年調査
9	市道遺跡	三塚字市道	〃				○	○	○	○	昭和49年調査
10	三塚町田遺跡	三塚字町田	〃				○				昭和50年調査
11	跡部町田遺跡	跡部字町田	〃				○				昭和46年調査
12	三塚鶴田遺跡	三塚字鶴田	〃					○			昭和50年調査
13	上桜井北遺跡	桜井字橋詰	〃				○	○			昭和52年調査
14	榛名平・坪の内遺跡	根岸字榛名平・坪の内	丘陵		○	○	○	○	○		平成5・6年調査
15	野沢館跡	野沢字居屋敷・北田	沖積、微高地					○	○		
16	前山城跡	小宮山字城山	山地					○	○		
17	薬師寺遺跡	原字屋敷	沖積、微高地						○	○	平成11年調査
18	宮添遺跡	三塚字宮添	〃				○	○	○		平成11年調査

第1表 中道遺跡Ⅱ周辺遺跡表



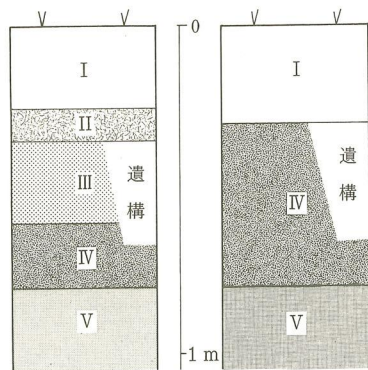
第3図 中道遺跡Ⅱ周辺遺跡図 (1:50,000)

第3節 基本層序

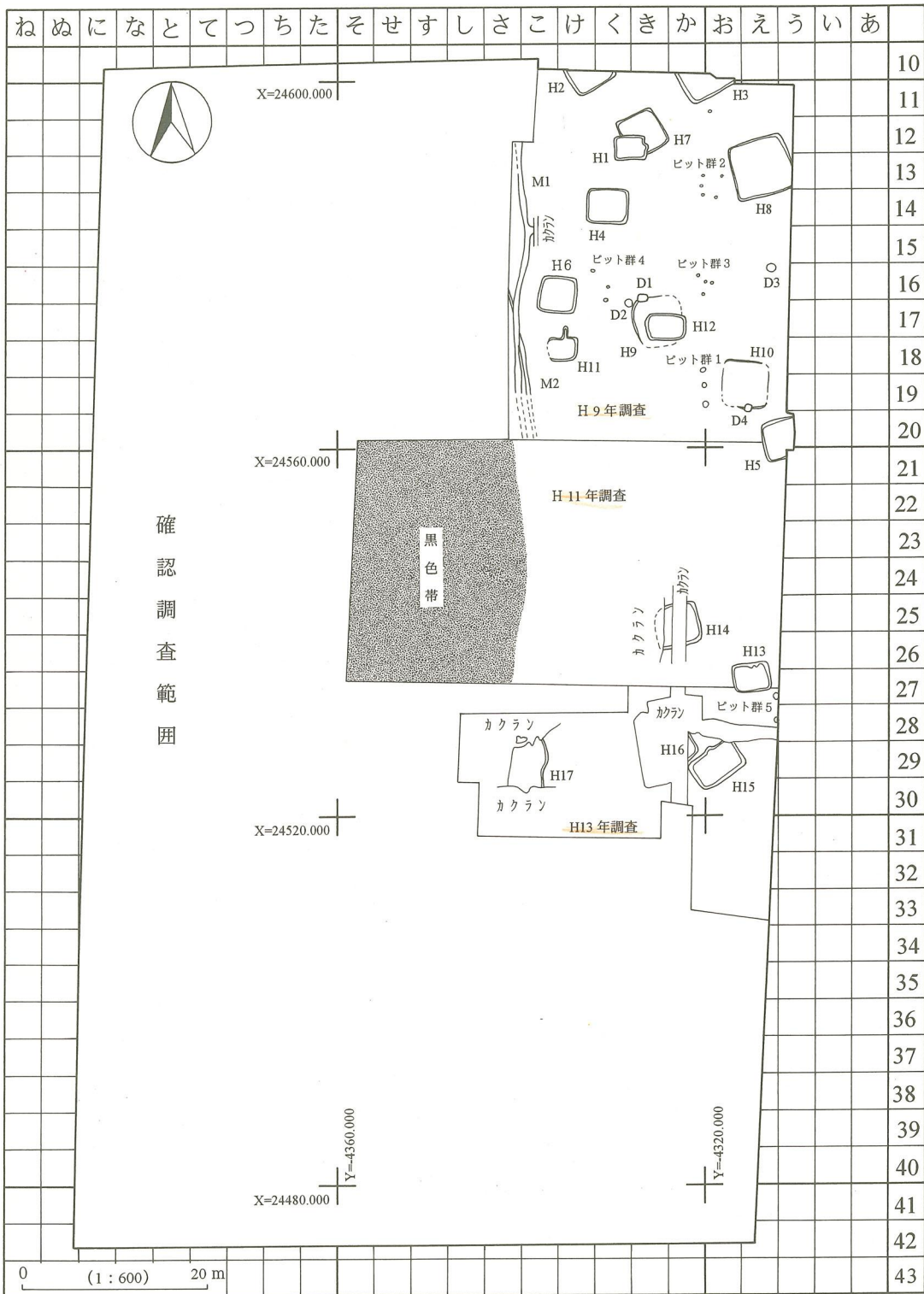
遺跡は千曲川左岸の氾濫源沖積地に所在し、西にはおよそ南から北方向に流れる片貝川が存在する。このため付近の層序は基本的には氾濫源特有の河床礫、沖積粘土層によって構成されている。

調査対象地は旧泉団地建設に際し、水田上部に盛り土整地されており、層序は調査区北では上から盛り土、旧水田面、黒色土、黄色シルト質土、砂礫層となり、南では盛り土、黄色シルト、砂礫層であった。このうち古代の遺構は北では黒色土、南では黄色シルト質土上面にて検出可能であった。

- | | |
|--------|------------------------|
| I 盛り土 | III 黒色土 粘性化、二酸化鉄多。強粘性。 |
| II 水田面 | IV 黄色土 砂多いシルト質。 |
| | V 砂礫層 川砂利 |



第4図 基本層序模式図



第5図 中道遺跡Ⅱ遺構配置図 (1:600)

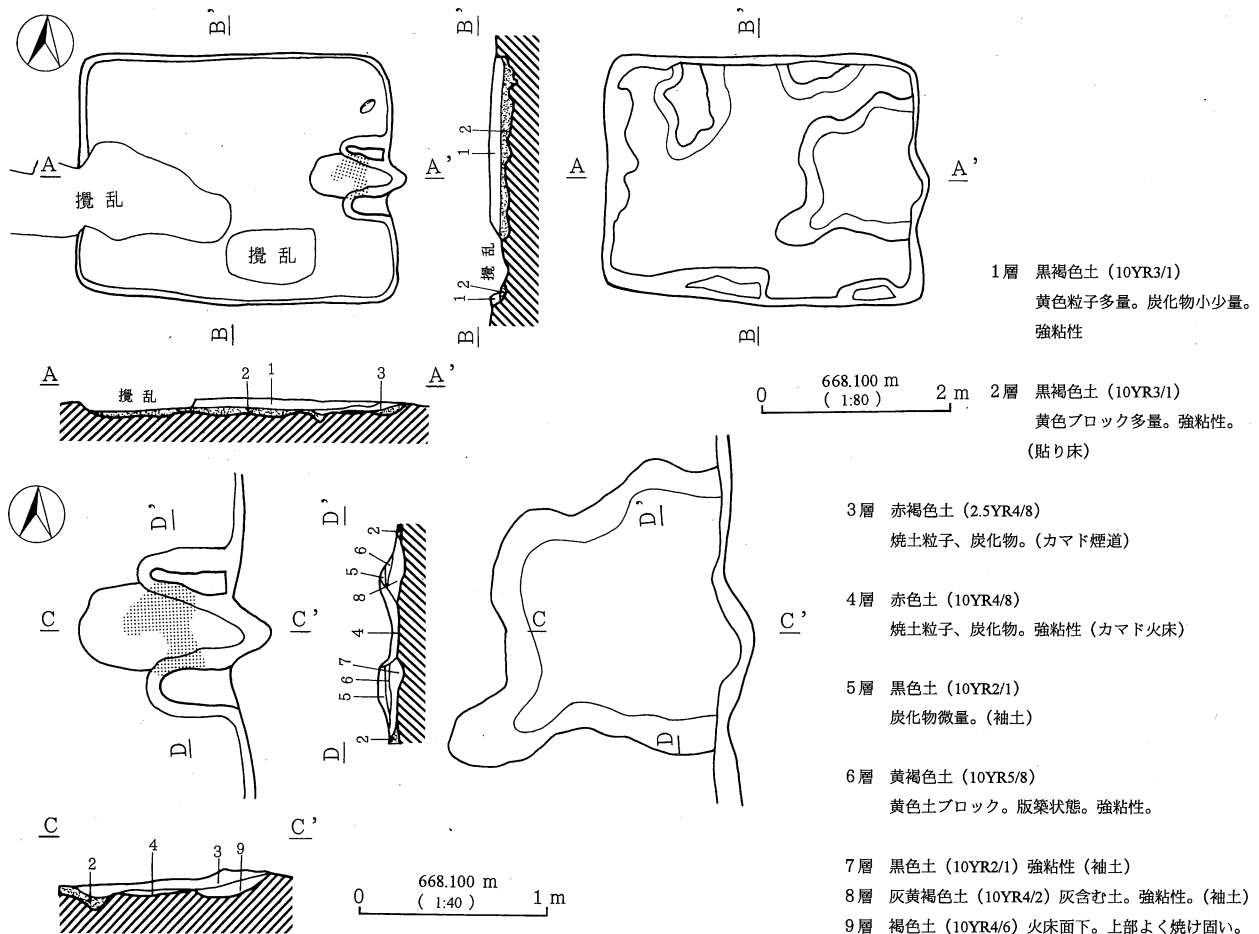
50-48

1200

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

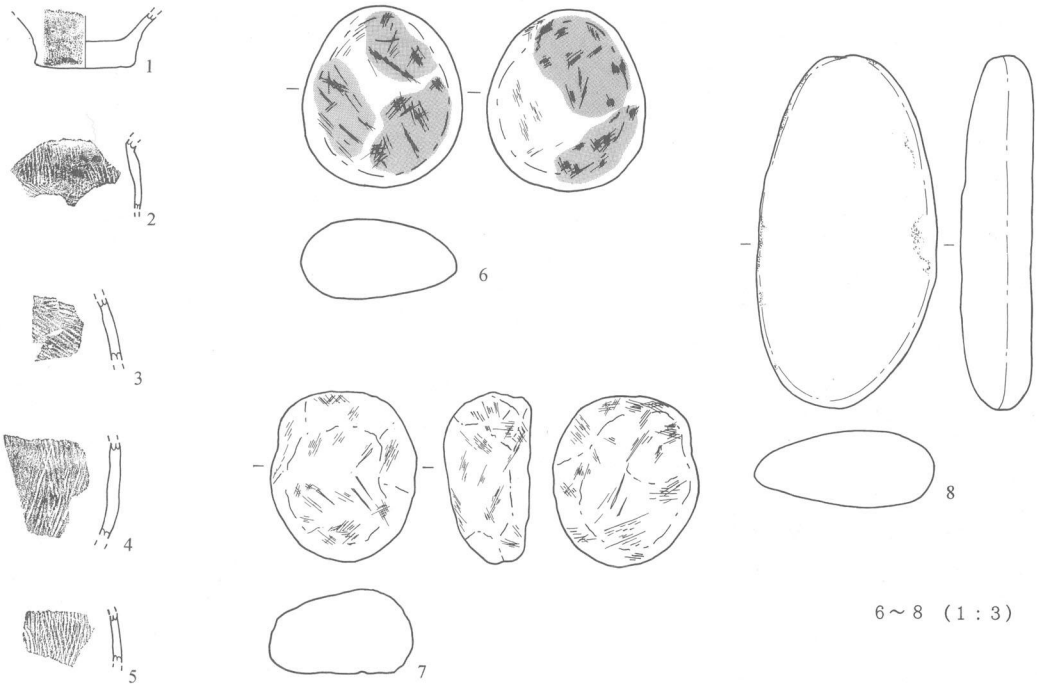
H1号住居址



第6図 H1号住居址実測図

遺構は調査区北のき-12グリットに位置し、H7号住居址を切る。覆土は黄褐色土粒子を多量に含む、強粘性の黒褐色土である。規模は南北2.7m、東西3.3m、床面までの深さ13cmを測る。平面形は東西に長い隅丸長方形である。壁面は掘り込まれている地山が強粘性であるため固く安定している。床面は踏み固められた状態で、ほぼ平坦である。ピットは認められなかった。カマドは東壁のほぼ中央に構築され、粘土で構築された袖が火床を挟み込むように40cmほどのびていた。火床には厚さ5cm内外の焼土が認められた。掘方は黄色シルトブロックを含む黒褐色土が埋め込まれ、この上面を床面として利用していた。

遺物は土師器、弥生式土器、擦り石、敲き石が出土した。遺物は小破片が大半で、図示したのは8点である。1～5は土師器だが、本住居址掘方付近からの出土のため混入又はH7の遺物である可能性がある。1は甕または壺の底部である。底部ナデ、外面櫛状工具による調整痕が認められる。2～5は甕または壺の体部破片で外面条線を施す。6は輝石安山岩製の擦り石、7は安山岩製で擦り、砥石と多目的に使用している。8は輝石安山岩製の敲き石である。本住居址は遺物が僅かなことから時期断定はできないが、H7を確実に切ることから5世紀後半以降と考えられる。



第7図 H1号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外側) (内側)
1	土師器	—	—	6.1	—	底部ヘラ削り後ナデ 外面櫛目状工具によるナデ	底部~体部の一部	良	鈍い褐色 明褐色
2	土師器	—	—	—	—	外面櫛目状工具によるナデ	頸部~体部破片	良	明赤褐色 明赤褐色
3	土師器	—	—	—	—	外面櫛目状工具によるナデ・赤色塗彩 内面ヘラナデ	胴部破片	良	鈍い褐色 褐色
4	土師器	—	—	—	—	外面櫛目状工具によるナデ 内面ヘラナデ	胴部破片	良	明褐色 鈍い褐色
5	土師器	—	—	—	—	外面櫛目状工具によるナデ 内面ヘラナデ	胴部破片	良	灰黄褐色 灰黄褐色

第2表 H1号住居址遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
6	擦り石	輝石安山岩	8.3	7.3	4.7	350
7	擦り・砥石	安山岩	7.8	6.8	4	245

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
8	敲き石	輝石安山岩	16.1	8.3	3.4	595

第3表 H1号住居址石類観察表

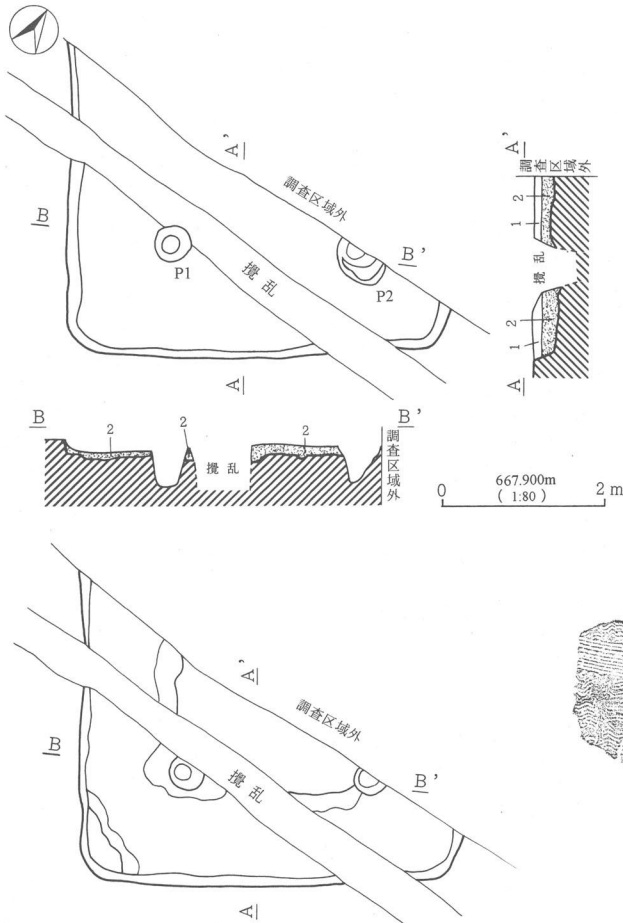
H2号住居址

遺構は調査区北端のけー10グリッドに位置し、住居址の半分は調査区外となる。覆土は炭化物を微量に含む強粘性の黒色土である。規模は東西4.4m、南北は確認された最大で3.5m、床面までの深さは10cm 内外を測る。平面形は確認状況から隅丸の方形と考えられる。壁面は地山が強粘性であることから固く安定し、床面は踏み固められた状態で、ほぼ平坦である。ピットは南側主柱穴と思われるピットが2個確認できた。カマドは確認できなかった。掘方は中央に比して周囲を深く掘り下げ、強粘性の黄色シルト粘土と黄色土ブロックの混合土を埋め込み、上面を床面として利用していた。埋め土の厚さは8~20cmを測る。

遺物は弥生式土器片・土師器片・擦り石が出土した。図示したのは4点である。1、2は弥生式土器甕の

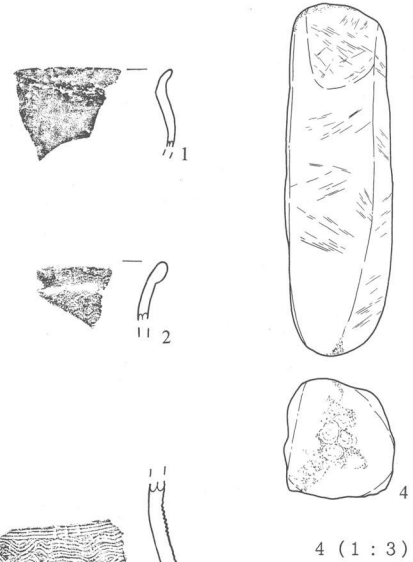
口縁破片と思われ、2は二重口縁で外面下部に櫛描波状文が認められる。3は甕胴部から頸部にかけての破片である。4は輝石安山岩製の擦り石である。

本住居址からは弥生式土器・土師器の小破片が出土し、遺構は全体が確認できず、カマドまたは炉の存在も認められなかったことから時期の確定はできなかった。



第8図 H2号住居址実測図

1層 黒色土 (10YR2/1) 炭化物微量。強粘性
2層 黄褐色土 (10YR5/8) 黄色シルト質土と黄色ブロックの混合土。
よく踏み固められている。



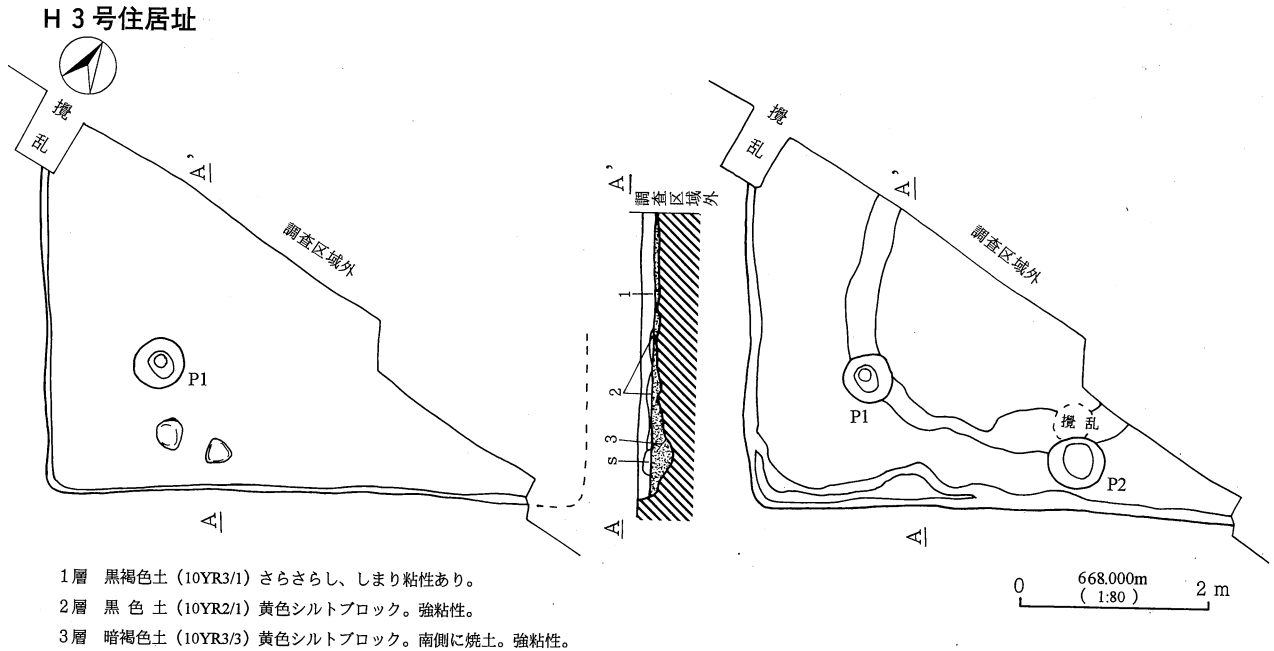
第9図 H2号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調 (外側) (内側)
1	弥生式土器	甕	-	-	-	口縁横ナデ 内面ヘラナデ	口縁破片	良	明赤褐色 鈍い赤褐色
2	弥生式土器	甕	-	-	-	口縁二重口縁 外面櫛描波状文	口縁破片	良	鈍い橙色 鈍い褐色
3	弥生式土器	甕	-	-	-	口辺・体部外面櫛描波状文 頸部外面簾状文	頸部付近破片	良	鈍い褐色 灰白色

第4表 H2号住居址遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
4	擦り石	輝石安山岩	16	5	5.5	598

第5表 H2号住居址石類観察表

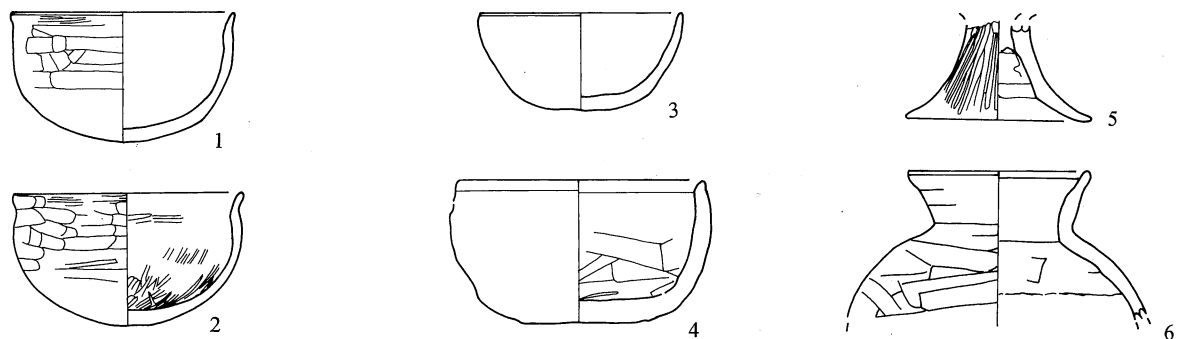


第10図 H 3 号住居址実測図

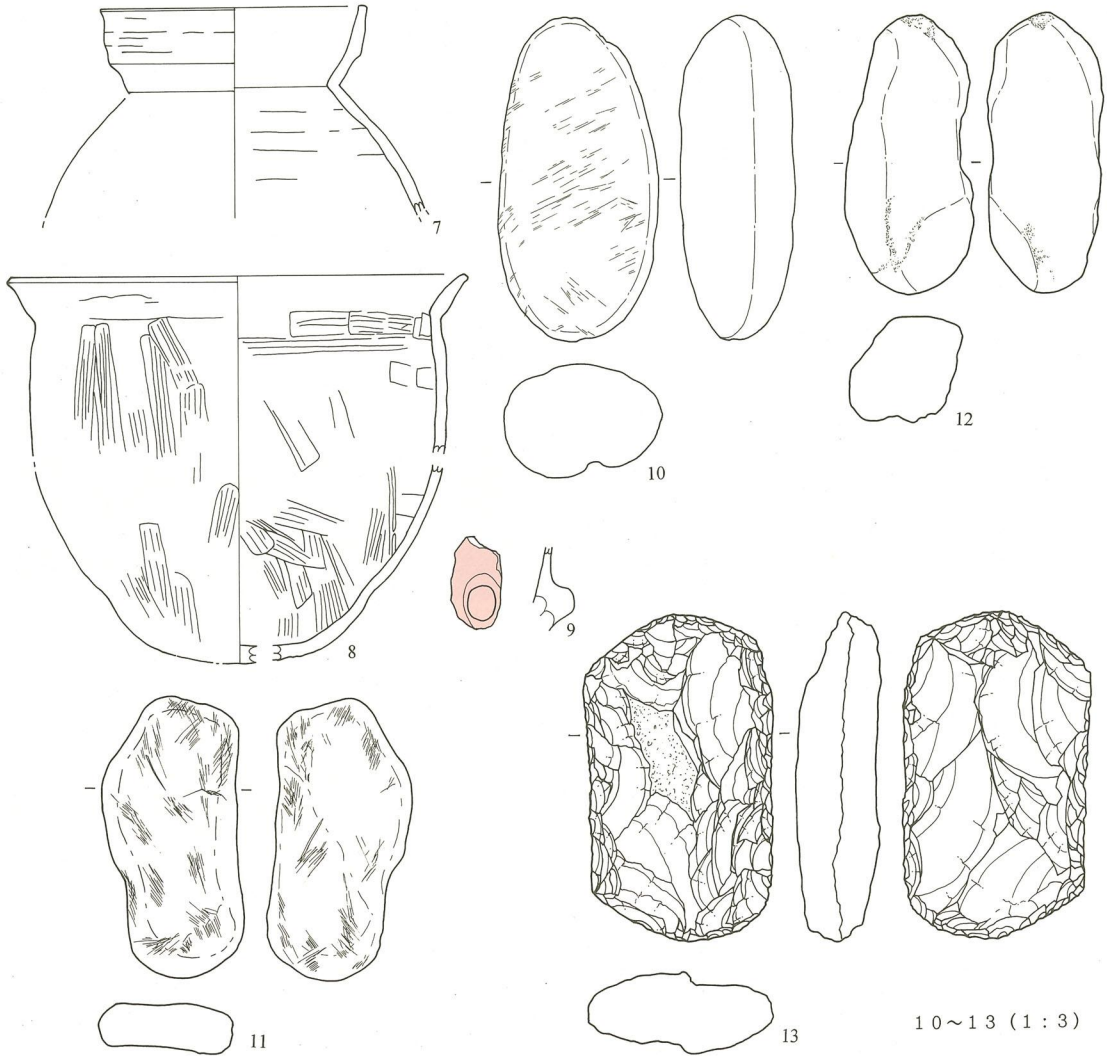
遺構は調査区北端のか-10グリッドに位置し、住居址の半分は調査区外となる。覆土は強粘性の黒褐色土及び床面付近の黒色土である。規模は確認できた最大規模で、東西5.2m、南北3.9m、床面までの深さ15cm内外を測る。平面形は確認状況から方形と考えられる。壁面は地山が強粘性のため固く安定している。床面は踏み固められた状態でピットは床面上から1個、掘方から1個確認できた。カマドは確認できなかった。掘方は中央に比して周囲を深く掘り下げ、強粘性の暗褐色土を埋め込み、上面を床面として利用していた。埋め土の厚さは4~20cmを測る。

遺物は土師器の坏・高坏・壺・甕、擦り石、敲き石、打製石斧が出土した。図示したのは13点である。1~4は坏で1、2は丸底の底部から丸みを持って立ち上がり、口縁端部で外反する。外面ヘラ削り後ミガキ、内面ヘラナデ後ミガキを施す。3は平底の底部から丸みを持って立ち上がり口縁部に至る。4は平底気味の底部から丸みを持って立ち上がり口縁端部で僅か外反する。5は高坏脚部の破損品である。やや裾広がりで背が低く、外面縦方向のミガキ、内面ヘラナデを施す。6、7は壺で6は小型、7はやや大きく、頸部は「く」の字で外傾し、口辺途中で直上し口縁部に至る。8は広口の甕で丸底の底部からやや丸みを持って立ち上がり、口辺はやや外反する。9は器種不明で外面赤色塗彩を施す。10は安山岩製の擦り石、11は輝石安山岩製で擦り、砥石に利用されている。12はチャート製の敲き石、13は輝石安山岩製の打製石斧である。

本住居址は5世紀後半、古墳時代中期と考えられ、同時期のH 7号住居址よりやや先行する。



第11図 H 3 号住居址遺物実測図 (1)



第12図 H3号住居址遺物実測図(2)

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調 (外側) (内側)
1	土師器	坏	11.8	丸底	6.9	口辺横ナデ 外面ヘラ削り後ミガキ 内面ミガキ	50	良	明赤褐色 明赤褐色
2	土師器	坏	12	丸底	7	口辺横ナデ 外面ヘラ削り後ミガキ 内面口辺横、みこみ部放射状ミガキ	35	良	橙色 橙色
3	土師器	坏	10.6	4	5.1	外面底部ヘラ削り 内面ナデ	30	良	橙色 橙色
4	土師器	坏	12.9	7.4	7.5	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 底部ナデ 内面ヘラナデ	60	良	明赤褐色 鈍い赤褐色
5	土師器	高坏	-	-	9.9	脚部外面縦ミガキ 裾部横ナデ 内面ヘラナデ	脚部40	良	橙色 鈍い褐色
6	土師器	壺	9.5	-	-	口辺横ナデ 外面横ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁~胴部破片	良	橙色 明赤褐色
7	土師器	壺	16.2	-	-	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁100~ 胴上半部破片	良	鈍い褐色 褐色 褐灰色
8	土師器	甕	28.2	丸底	23.7	口縁横ナデ 外面櫛目状工具による縦削り、内面櫛目状ナデ	70	良	鈍い褐色 褐色
9	土師器	不明	-	-	-	外面赤色塗彩	破片	良	赤色 鈍い褐色

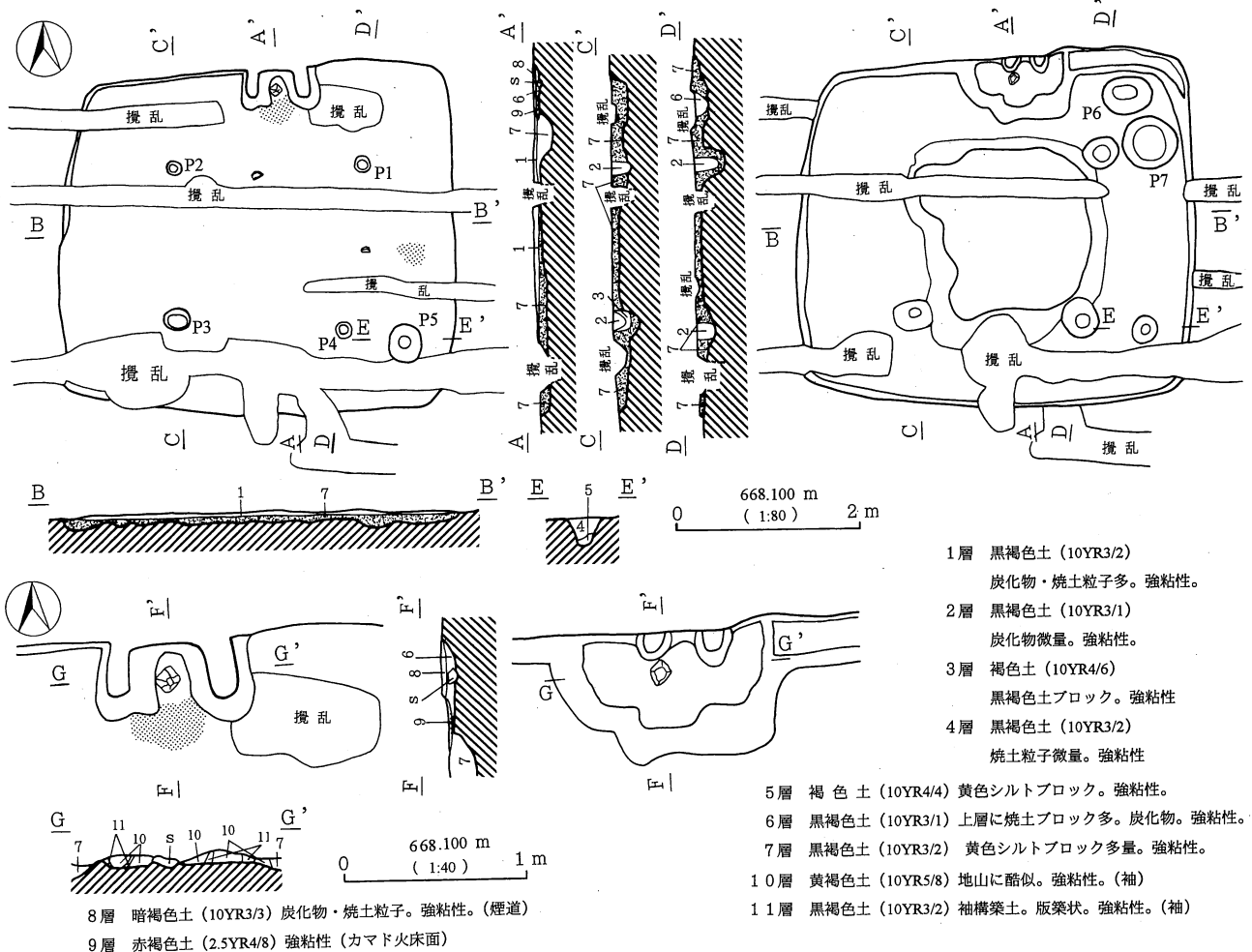
第6表 H3号住居址遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
10	擦り石	安山岩	14.7	7.4	5.2	610
11	擦り・砥石	輝石安山岩	12.8	6.6	2.5	330

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
12	敲き石	チャート	12.7	5.9	4.8	515
13	打製石斧	輝石安山岩	14.9	8.5	3.8	660

第7表 H 3号住居址石類観察表

H 4号住居址



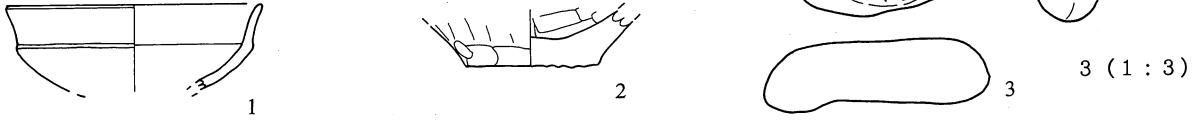
第13図 H 4号住居址実測図

遺構は調査区北のくー14グリッドに位置し、床面は一部床面が露出した状態であった。覆土は炭化物、焼土粒子を含む強粘性の黒褐色土が僅かに堆積していた。規模は東西4.3m、南北3.8m、床面までの深さは最大で5cmを測る。平面形は隅丸方形である。壁は北壁、西壁の一部が僅かに確認できた。床面は東西方向の攪乱によって一部破壊されているが残存部は比較的平坦で固く、調査の結果2面確認でき、第1面上でピットが5個確認できた。このうちP1～4が支柱穴である。第2面上でのピットの位置が同一であることから柱の移動を伴わない改築又は補修が行われたと考えられる。カマドは北壁中央に構築され、北壁から住居内に40cmほどのびる袖及び火床が確認できた。袖は粘土を使用し、火床を挟み込むように構築されていた。火床付近には支脚石と思われる扁平な石が埋め込まれ、その南側に厚さ8cm内外の焼土が認められた。掘方は中央に比して周囲を深く掘り下げ、東壁際にピット2個が確認できた。埋め込まれた土は黄色シルトブロックを多量に含む強粘性の黒褐色土で5～22cmの厚さを持ち、上面を床面として利用していた。

遺物は土師器坏・甕、擦り石が出土した。1は明瞭な稜を有する坏の破片、2は甕の底部破片、3は輝石

安山岩製の擦り石である。

本住居址は出土遺物が僅かなため断定はできないが、古墳時代後期である可能性が考えられる。



第14図 H4号住居址遺物実測図

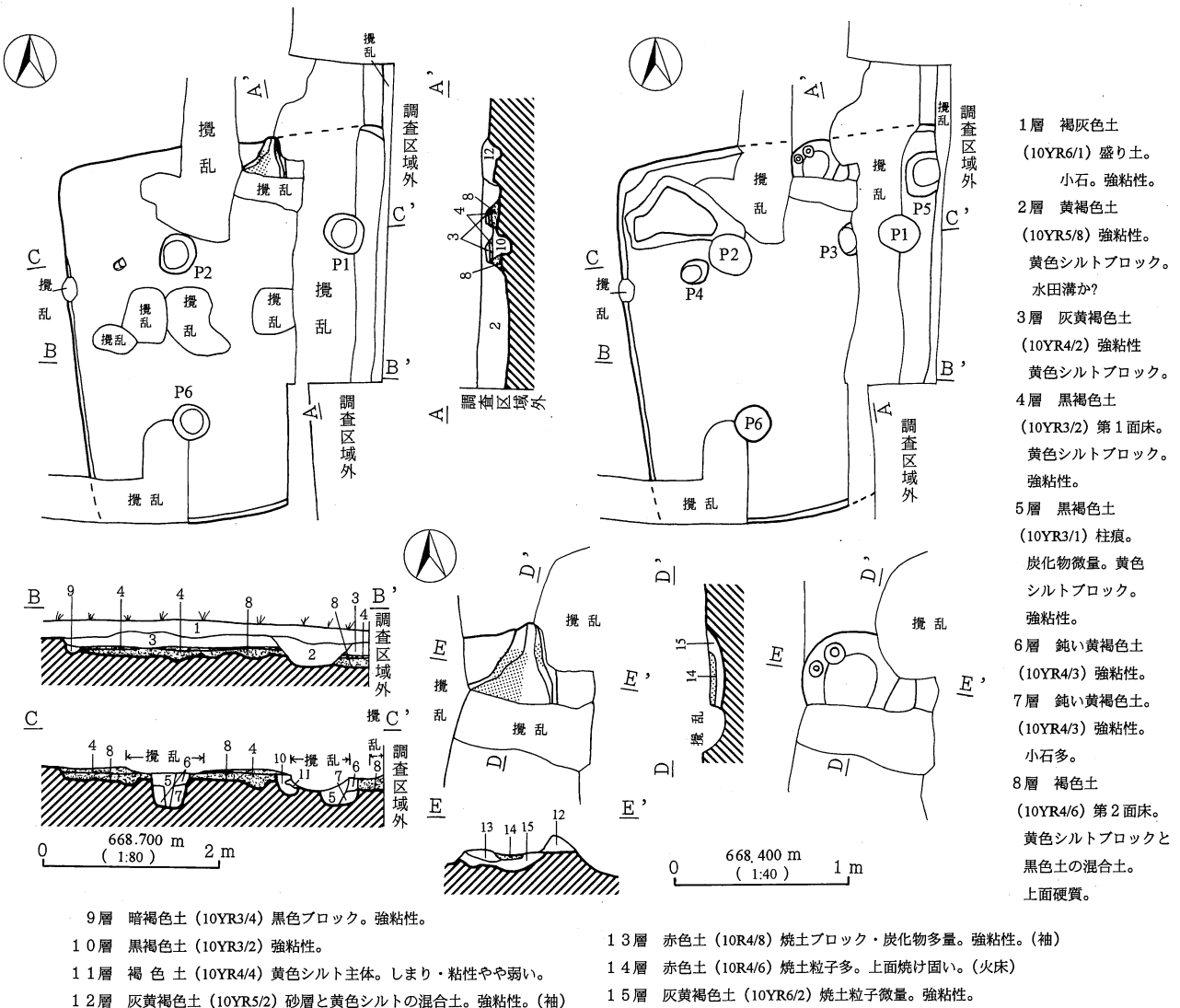
番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調 (外側) (内側)
1	土師器	坏	[13.5]	丸底	—	口辺横ナデ 外面ヘラケズリ後ナデ	35	良	褐灰色 褐灰色
2	土師器	甕	—	[13.5]	—	底部ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部破片	良	橙色 灰褐色

第8表 H4号住居址遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
3	擦り石	輝石安山岩	7.3	9.3	2.9	310

第9表 H4号住居址石類観察表

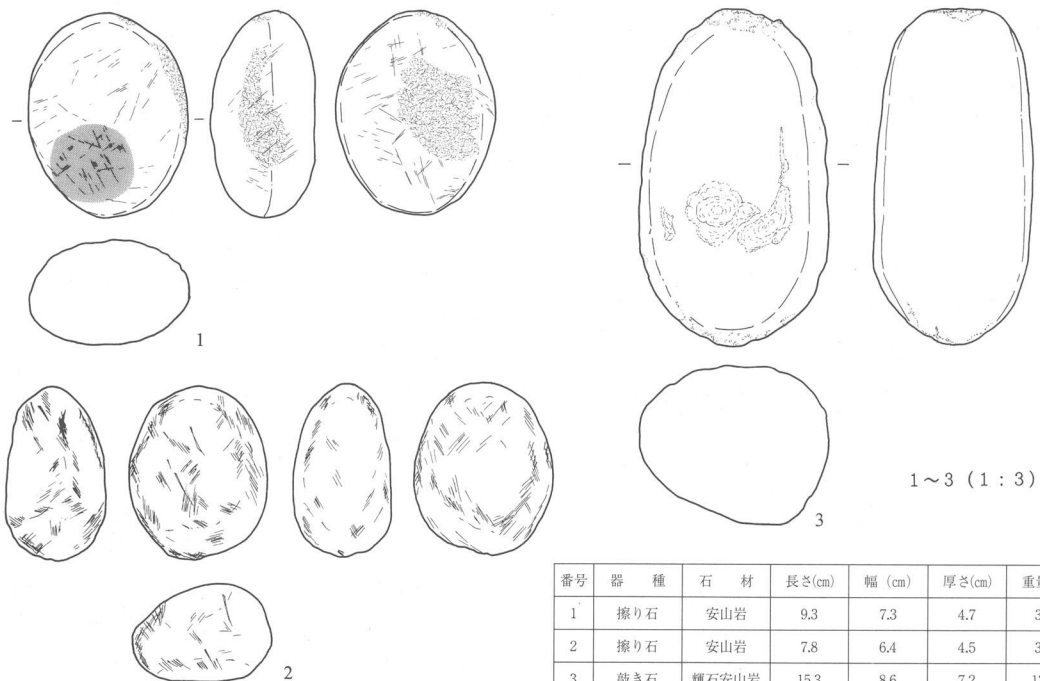
H5号住居址



第15図 H5号住居址実測図

遺構はうー20グリッドに位置し、東側は調査区外となる。なお、本住居址は工事計画の都合上北側は平成9年度、南側は平成11年度に調査を行った。覆土は強粘性の黄色シルトブロックを含む灰黄褐色土である。規模は南北4.3m、東西は確認された最大で3.7m、床面までの深さ8cm内外を測る。平面形は残存状況からやや隅丸の方形と考えられる。確認できた壁は西、南壁の一部と僅かである。床面は攪乱による破壊が著しいが、残存部はほぼ平坦で固く3cm内外の厚みで貼り床されていた。ピットは床面上で3個、掘方で3個確認できP1・2・6が主柱穴と考えられた。カマドは北壁のほぼ中央と思われる位置に構築されているが、カマド周辺は攪乱が激しく火床の一部を確認するにとどまった。掘方は5~15cmの厚みで黄色シルトブロックと黒色土の混合土である褐色土が埋め込まれ、上面は固く締まっていた。

遺物は土師器の小破片、擦り石、敲き石が出土したが、土器は小破片のみで、図示したのは安山岩製の擦り石2点、輝石安山岩製の敲き石1点である。



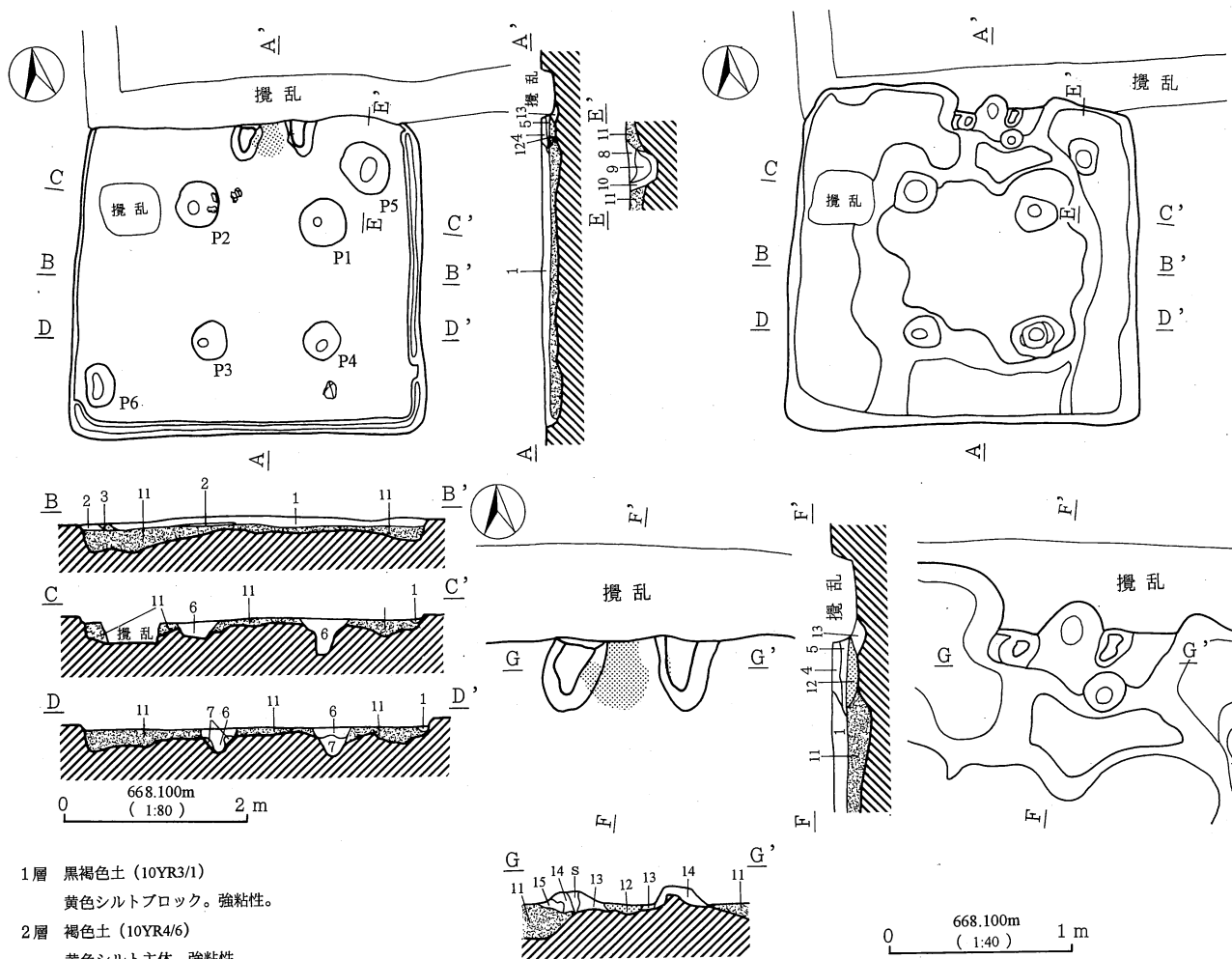
第16図 H5号住居址遺物実測図

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
1	擦り石	安山岩	9.3	7.3	4.7	380
2	擦り石	安山岩	7.8	6.4	4.5	305
3	敲き石	輝石安山岩	15.3	8.6	7.2	1300

第10表 H5号住居址遺物観察表

H6号住居址

遺構はけー16グリッドに位置し、北壁付近は攪乱によって破壊されている。覆土は黄色シルトブロックを含む黒褐色土を主とする。規模は東西3.6m、南北は確認できた最大で3.4m、床面までの深さは10cm内外を測る。平面形は残存状態からやや隅丸の方形と考えられる。東、南壁際には幅12cm、深さ8cm内外の周溝が認められる。床面はほぼ平坦で全体に固い。ピットは6個確認でき、P1~4が主柱穴と考えられる。カマドは北壁中央付近に構築されているが、北側約半分は攪乱によって破壊されているため確認できたのは両袖先端付近及び火床の一部である。袖は地山の土を利用し、西袖には補強の石材が埋め込まれていた。火床は厚さ6cm内外の焼土が存在し、この上面は固く焼け締まっていた。掘方は中央に比して周囲を深く掘り下げ、5~20cmの厚みで暗褐色土が埋め込まれ、上面を床面として利用していた。

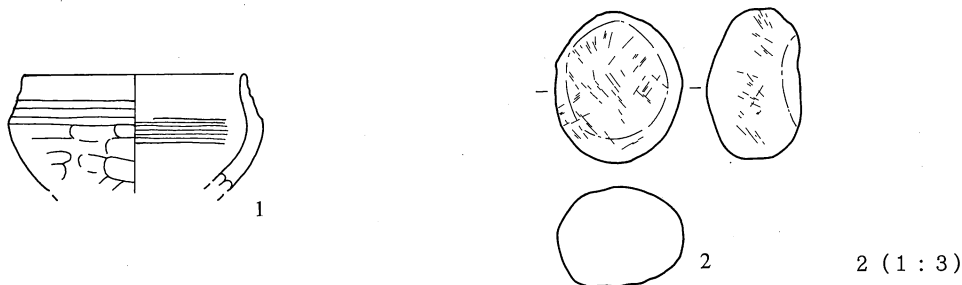


- 1層 黒褐色土 (10YR3/1) 黄色シルトブロック。強粘性。
- 2層 褐色土 (10YR4/6) 黄色シルト主体。強粘性。
- 3層 赤褐色土 (2.5YR4/8) 焼土層。しまり、粘性弱い。
- 4層 赤褐色土 (2.5YR4/8) 焼土ブロック・炭化物。しまり、粘性弱い。
- 5層 黒色土 (10YR2/1) 焼土ブロック・炭化物多。しまり、粘性弱い。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1) 黄色シルトブロック多。しまり、粘性ややあり。
- 7層 黄褐色土 (10YR5/8) 黄色シルトブロックと黒褐色土ブロック混合土。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/1) 黄色シルト粒子。強粘性。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/1) 焼土ブロック。強粘性。
- 10層 褐色土 (10YR4/4) 黄色シルトブロック多。強粘性。
- 11層 暗褐色土 (10YR3/4) 上面硬質。黄色シルトブロック状。下層部は黒色土ブロック。(貼り床)
- 12層 赤色土 (10R4/8) 上面火を受け固い。(火床面)
- 13層 黒褐色土 (10YR3/2) 焼土粒子・炭化物多量。しまり、粘性弱い。
- 14層 灰黄褐色土 (10YR5/2) 黄色シルトブロックを固める。
- 15層 褐色土 (10YR4/6) 黒色・黄色シルトの混合土。強粘性。

第17図 H6号住居址実測図

遺物は土師器の鉢・甕、擦り石が出土したが土器は大半が小破片で、図示できたのは2点である。1は体部途中に明瞭な稜を有する鉢で、形状は坏ともとれるがやや深みがあるため鉢とした。2は安山岩製の擦り石である。

本住居址は6世紀代、古墳時代後期と考えられる。



第18図 H6号住居址遺物実測図

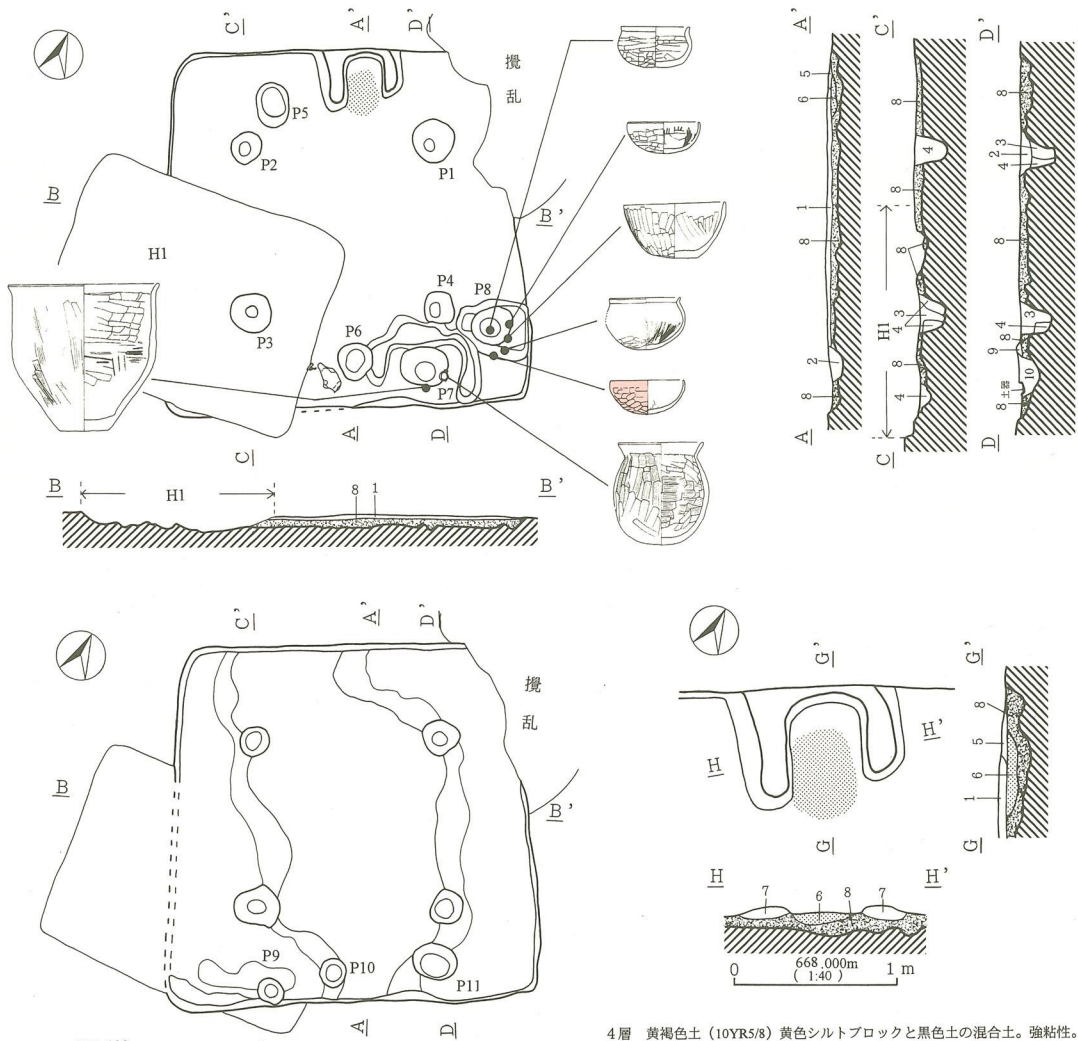
番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調 (外側) (内側)
1	土師器	鉢	11.8	-	-	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面横ナデ 指縦ナデ	60	良	褐灰色 褐灰色

第11表 H 6号住居址遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)
2	擦り石	安山岩	6	5	3.7	150

第12表 H 6号住居址石類観察表

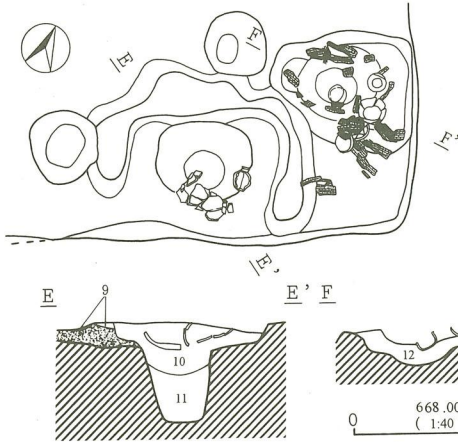
H 7号住居址



- 1層 黒褐色土 (10YR3/1) 灰シルト・黄色シルト。炭化物・焼土粒子多量。強粘性。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/2) 黄色シルト。強粘性。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/4) しまりやや弱く粘性あり。(柱痕)

- 4層 黄褐色土 (10YR5/8) 黄色シルトブロックと黒色土の混合土。強粘性。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1) 焼土・炭化物多。しまり、粘性弱い。
- 6層 赤色土 (10R4/8) 上面火を受け硬質化。(火床面)
- 7層 褐灰色土 (10YR4/1) 黄色シルトブロック。強粘性。(袖)
- 8層 黒褐色土 (10YR3/1) 黄色シルトブロック多。強粘性。(貼り床)

第19図 H 7号住居址実測図 (1)

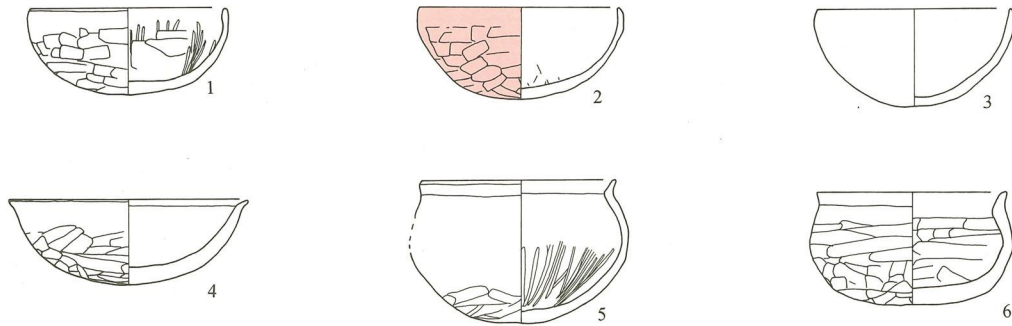


第20図 H7号住居址実測図(2)

炭化材及び土器が認められ付近には土坑・ピット、窪みが集中することから何らかの作業場であった可能性が考えられる。カマドは北壁のほぼ中央に構築され、両袖及び火床が確認できた。袖は北壁から火床を挟み込むように50cmほど住居内にのび、火床は厚さ6cm程の焼土が堆積し、上面は固く焼け締まっていた。掘方は中央に比して西、東壁寄りをやや深く掘り下げ、6~10cmの厚みで黄色シルトブロックを多く含む黒褐色土が埋め込まれ、上面を床面として利用していた。

遺物は土師器の坏、鉢、壺、擦り石、白玉、混入として打製石斧が出土した。図示したのは17点である。1~4は坏で丸底の底部から立ち上がり1、2、3はやや内彎気味に口縁部に立ち上がる。2の外縁は摩耗が激しいが、赤色塗彩された痕跡が認められる。4は口縁にてやや外反し外面へラ削りを施す。5、6は丸底気味の坏で丸みを持って立ち上がり、口縁端部で僅かに外反する。5は内面放射状のミガキ、外面ハケナデ後ミガキが施され光沢を持つ。6は5に比してやや表面にざらつき感があり外面へラ削り後、部分的にナデを施す。7は広口の鉢で外面縦方向の削り、内面へラナデ、底部へラ削りを施す。8は丸底の甕で内外面ともに櫛目状工具による調整痕を持つ。9は広口の甕で外面櫛目状の調整痕が残る。10は安山岩製の擦り石、11~16は滑石製の白玉である。17は輝石安山岩製の打製石斧である。

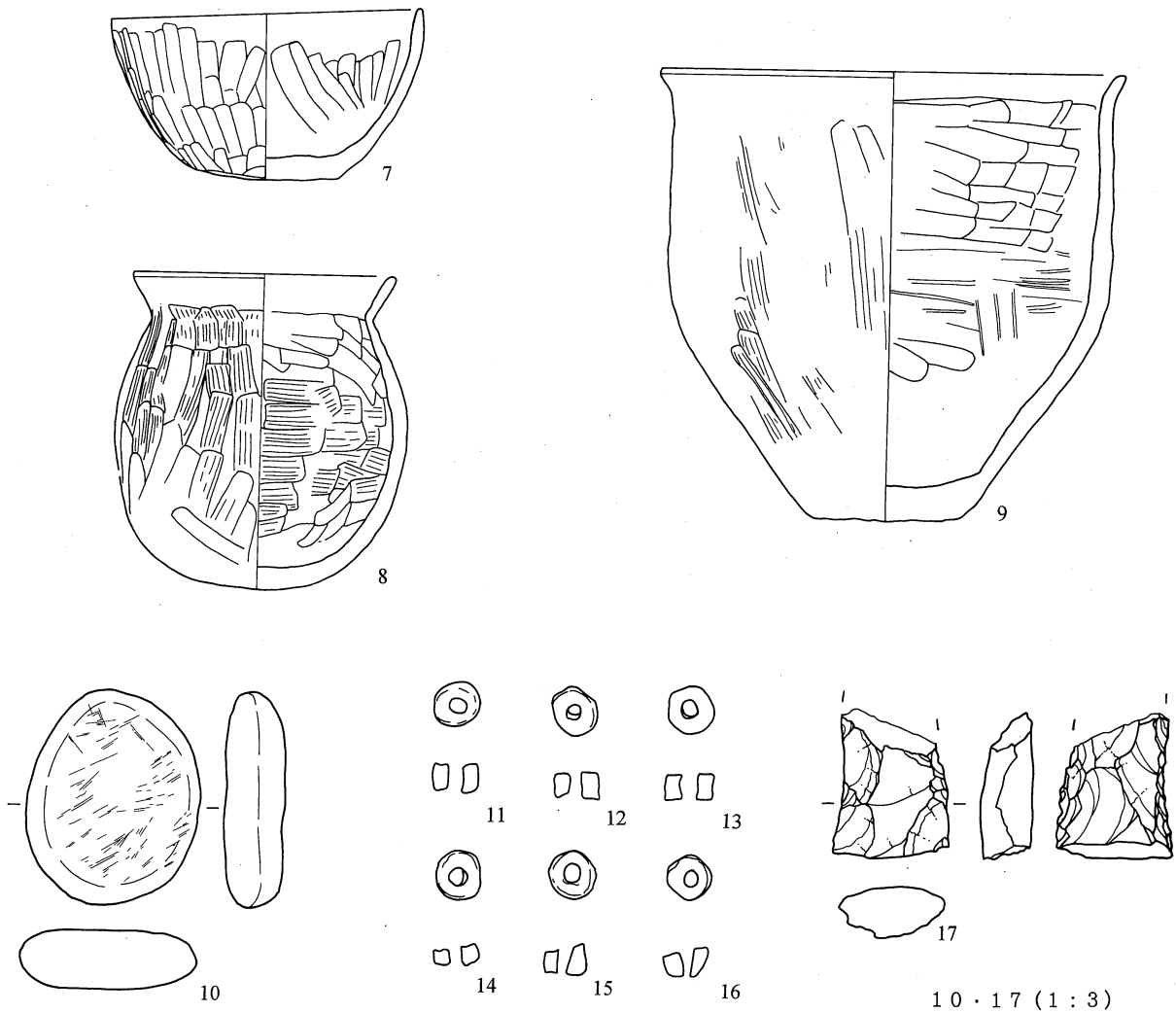
本住居址は5世紀後半、古墳時代と考えられ、ほぼ同時期のH3よりやや時代が下る。



第21図 H7号住居址遺物実測図(1)

- 9層 黄褐色土(10YR5/8)黄色ブロック張り付け状態。強粘性。
- 10層 黒色土(10YR2/1)焼土粒子・炭化物多。しまり弱く、粘性あり。
- 11層 黒褐色土(10YR3/1)黄色シルト多。しまり、粘性やや弱い。
- 12層 黒褐色土(10YR3/2)黄色シルト・黒色シルト。上層炭化物。焼土粒子。

遺構は調査区北のき-12グリッドに位置し、H1に切られ、北東コーナー付近は攪乱に破壊されている。規模は東西4.4m、南北4.2m、床面までの深さ5cm内外を測る。平面形はやや隅丸の方形と思われる。床面はほぼ平坦で固い。ピットは床面上で8個確認でき、P1~4が支柱穴、P6は入り口に関係すると思われる。また、南東コーナー付近には多量の



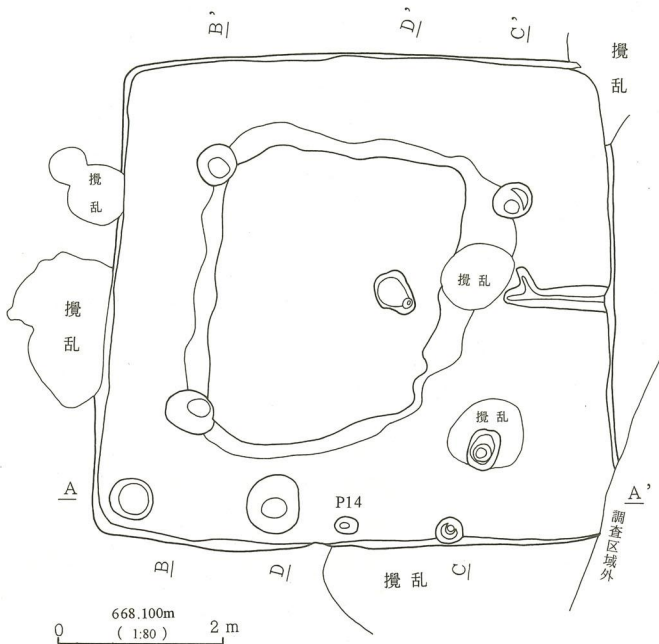
第22図 H7号住居址遺物実測図(2)

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調 (外側) 色調 (内側)
1	土師器	坏	12	丸底	5.3	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ナデ・放射状ミガキ・やや摩耗	95	良	橙色 鈍い橙色
2	土師器	坏	12.2	丸底	5.6	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面細かいナデ・やや摩耗 赤色塗彩	85	良	橙色 鈍い橙色
3	土師器	坏	11.8	丸底	5.9	口縁横ナデ 内外面摩耗のため調整痕不鮮明	60	良	橙色 橙色
4	土師器	坏	14.5	丸底	5.2	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	50	良	鈍い赤褐色 鈍い橙色
5	土師器	坏	11.7	丸底	8.7	口辺横ナデ 外面ヘラ削り後ナデ 内面放射状ミガキ	85	良	淡赤褐色 鈍い橙色
6	土師器	坏	11.5	丸底	6.8	口辺横ナデ 外面ヘラ削り特に底部付近強い削り 内面ヘラナデ	100	良	明赤褐色 明赤褐色
7	土師器	鉢	17	7.8	9.1	口縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面斜めヘラナデ 底部削り	100	良	鈍い橙色 鈍い橙色
8	土師器	甕	14.2	丸底	17.2	口辺横ナデ 外面櫛目状縦削り 内面櫛目状横ナデ	70	良	橙色 浅黄褐色
9	土師器	甕	25.3	8.1	24.5	口縁横ナデ 外面縦櫛目工具による縦削り後ナデ 内面ヘラナデ	40	良	鈍い褐色 鈍い褐色

第13表 H7号住居址遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
10	擦り石	安山岩	8.7	7.2	2.4	215	17	打製石斧	輝石安山岩	6	4.8	2	72.9

第14表 H7号住居址石類観察表



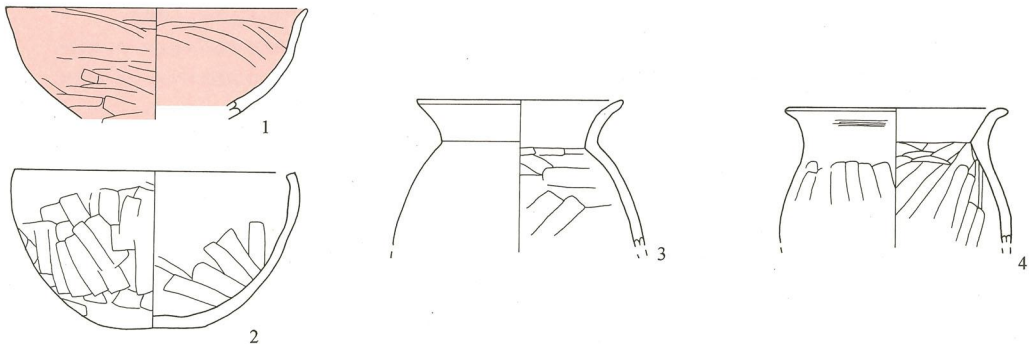
第24図 H 8号住居址掘方実測図

遺構は調査区北の東端え-13グリッドに位置し、僅かに南東コーナーは調査区外となる。覆土は、遺構検出状態で部分的に床面が露出直前という状況であったため不明である。規模は東西6.0m、南北5.9m、床面までの深さは最大壁高で10cm内外を測る。平面形はやや隅丸の方形である。壁は北東及び南西コーナー付近でのみ確認でき、他は既に検出面と床面がほぼ同じ高さであった。床面はほぼ平坦で特に中央付近が固く締まっていた。ピットは床面上で13個確認でき、P1～4が支柱穴と考えられた。カマドは北壁中央に構築され、地山の土で作られた袖及び火床が確認できた。袖は北壁から住居内に火床を挟み込むように西袖90cm、東袖70cmほどのび、火床は厚さ5cm内外

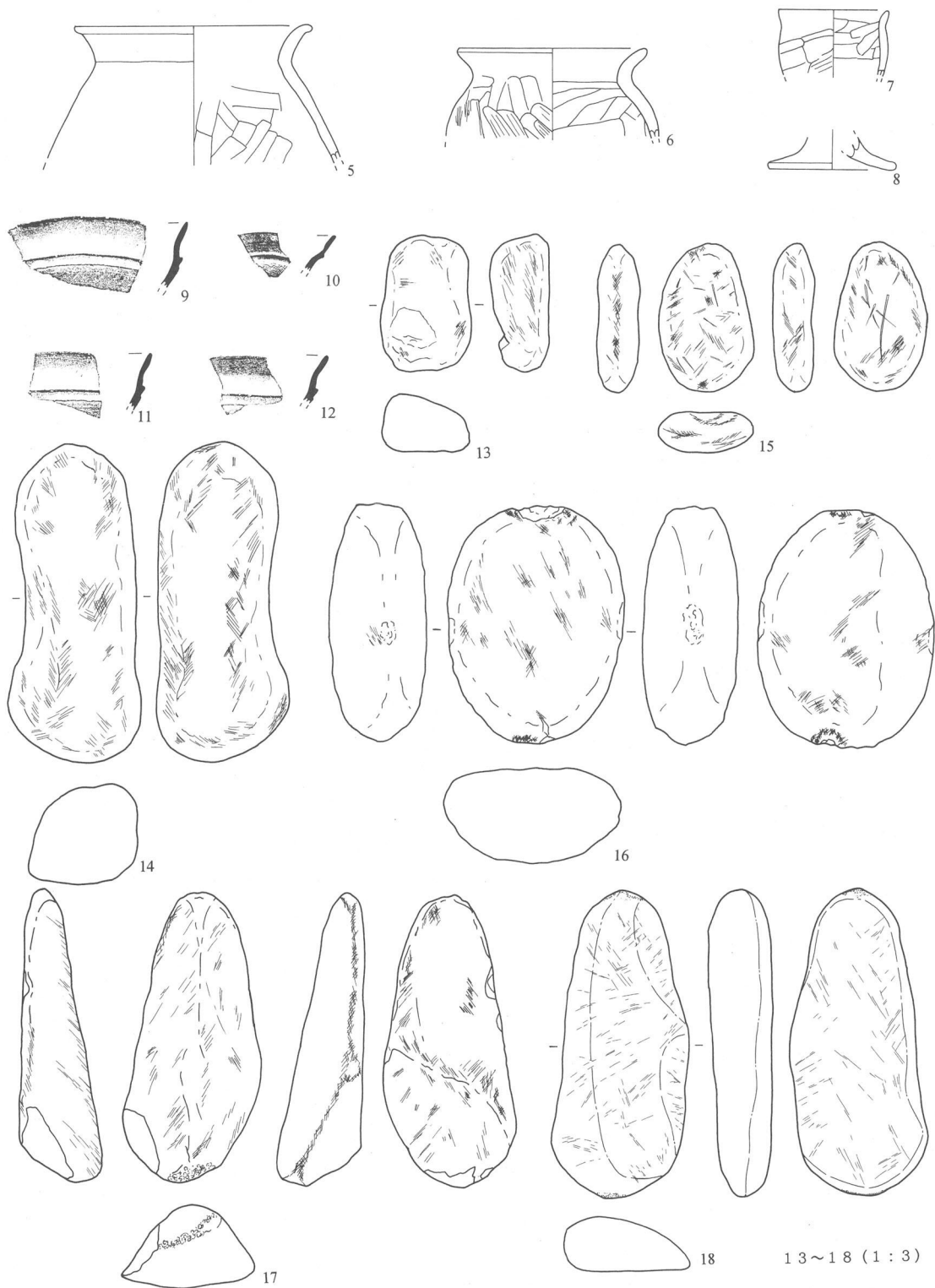
焼土化し、上面は固く焼け締まっていた。掘方は中央に比して周囲はやや深く掘り下げられ、8～15cmの厚みで黄褐色シルトブロックを含む黒褐色土が埋め込まれていた。

遺物は土師器の坏・鉢・甕・高坏、須恵器、擦り石、砥石、土製円盤などが出土した。図示したのは23点である。1は坏で内外面ともに赤色塗彩を施し口縁は僅かに外反する。2は鉢で削りによってやや平らにされた底部から丸みを持って立ち上がり、内彎気味に口縁に至る。3～6は甕の口縁付近の破片である。7は小型の甕、8は高坏脚部の破片である。9～12は須恵器で9、11、12は高坏の坏部、10は隙の口縁破片で外面に櫛描波状文を施す。9、11、12は同一個体と思われる。13、14は擦り石、15は安山岩製の砥石、16、17は擦り、敲きで使用され、16は安山岩、17は輝石安山岩製である。18、19は輝石安山岩製で砥石、敲き石として使用され、20は輝石安山岩製で砥石、台石として利用されていた。21、22は黒曜石の剥片、23は土器片を利用したと思われる土製円盤で径2.5cmを測る。

本住居址は5世紀後半、古墳時代中期と考えられる。

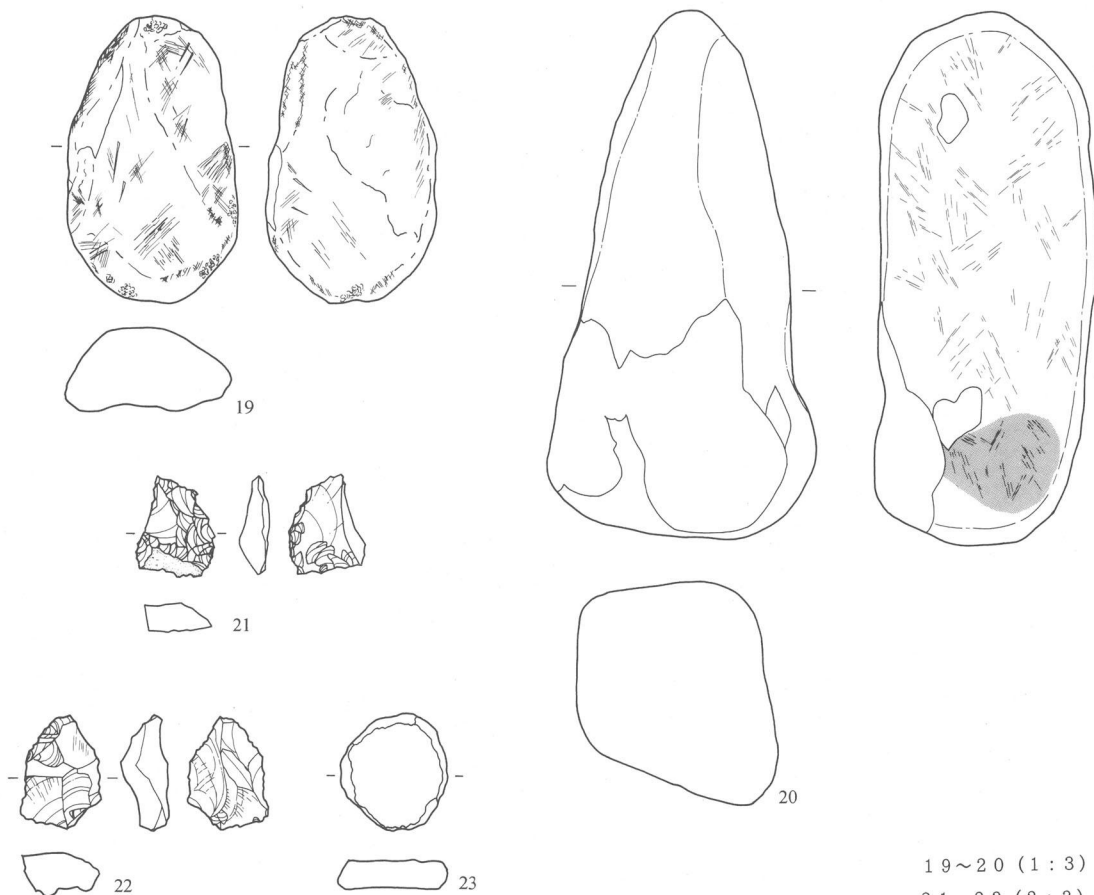


第25図 H 8号住居址遺物実測図(1)



13~18 (1:3)

第26图 H 8号住居址遗物实测图(2)



19~20 (1:3)
21~23 (2:3)

第27図 H8号住居址遺物実測図(3)

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調 (外側)	色調 (内側)
1	土師器	坏	[18]	-	-	口辺横ナデ 外面削り後ナデ 内面ヘラナデ 内外面赤色塗彩	口縁~体部破片	良	赤色	赤色
2	土師器	鉢	[14]	[5]	7.8	口縁横ナデ 外面縦ヘラ削り・底部ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁~底部破片	良	鈍い黄褐色	鈍い黄褐色
3	土師器	甕	[12.1]	-	-	口辺横ナデ 外面やや摩耗、横・斜めヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁~胴上半部	良	鈍い褐色	鈍い褐色
4	土師器	甕	[13.6]	-	-	口辺横ナデ 外面縦ヘラ削り後ナデ 内面強い斜めヘラナデ	口縁~胴上半部	良	鈍い褐色	鈍い褐色
5	土師器	甕	[17.1]	-	-	口辺横ナデ 外面摩耗 内面横・斜めヘラナデ	口縁~胴上半部	良	鈍い褐色	鈍い褐色
6	土師器	甕	13.7	-	-	口辺横ナデ 外面斜め櫛目状工具の削り 内面横・斜めヘラナデ	口縁~胴上半部	良	鈍い赤褐色	鈍い褐色
7	土師器	小型甕	[8]	-	-	口辺横ナデ 外面櫛目状工具による斜め削り 内面ヘラナデ	口縁~胴上半部	良	明赤褐色	黒褐色
8	土師器	高坏	-	9.2	-	脚部外面ミガキ 裾部内外面横ナデ	脚部裾部破片	良	明赤褐色	明赤褐色
9	須恵器	高坏	-	-	-	ロクロ横ナデ 外面細い櫛描波状紋	口辺付近破片	良好	灰色	灰色
10	須恵器	瓿	-	-	-	ロクロ横ナデ 外面細い櫛描波状紋	口辺付近破片	良好	灰色	灰色
11	須恵器	高坏	-	-	-	口辺横ナデ 外面櫛目状工具による斜め削り 内面ヘラナデ	口縁付近破片	良好	灰色	灰色
12	須恵器	高坏	-	-	-	口辺横ナデ 外面櫛目状工具による斜め削り 内面ヘラナデ	口縁付近破片	良好	灰色	灰色

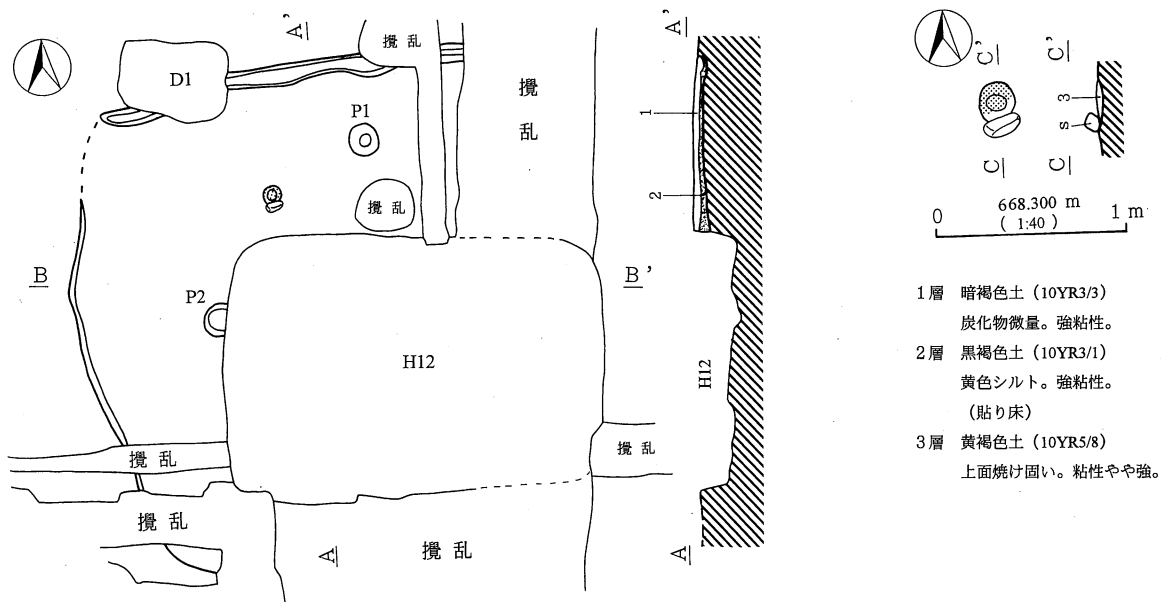
第16表 H8号住居址遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
13	擦り石	ホルンヘルス	7.4	4.9	3.2	175
14	擦り石	輝石安山岩	17.2	7.1	5.6	1005
15	砥石	安山岩	8	5.1	2.3	126.5
16	擦り・敲き石	安山岩	12.8	9.5	5.2	850
17	擦り・敲き石	輝石安山岩	15.7	7.2	4.6	430

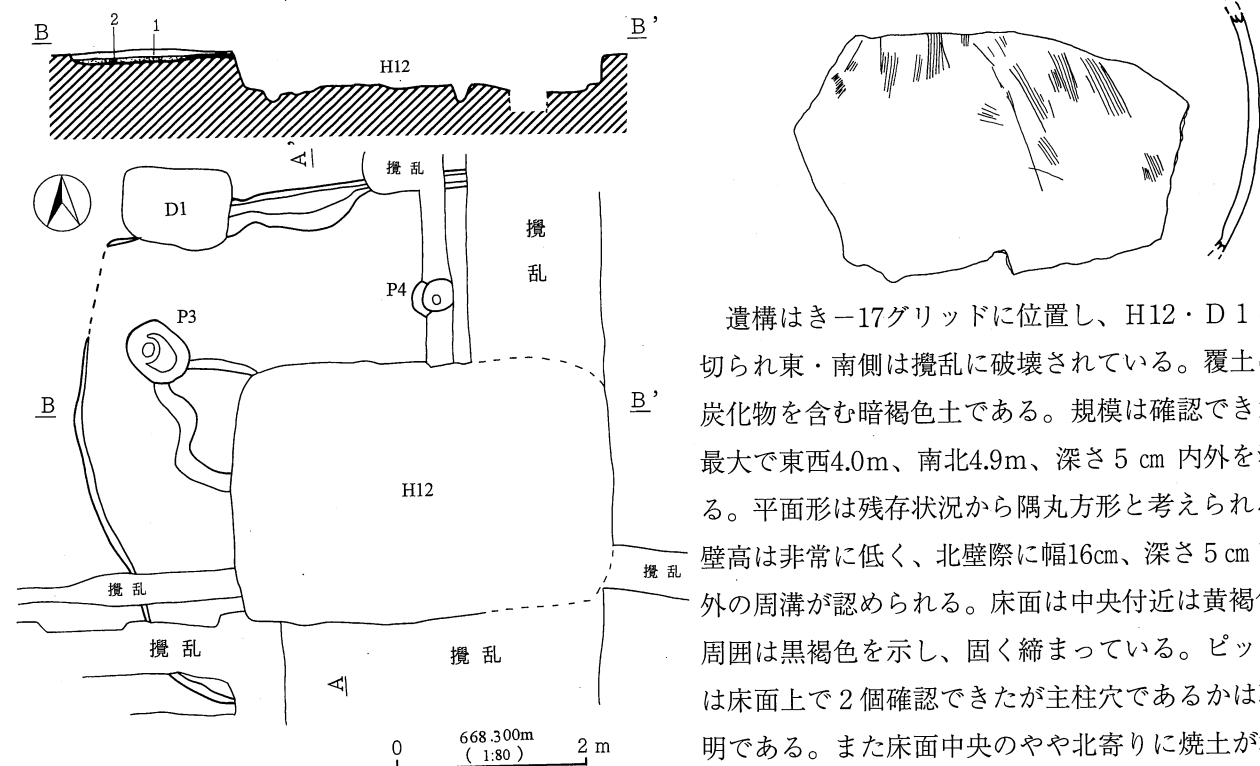
番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
18	砥石・敲き石	輝石安山岩	16.4	7.4	3.4	600
19	砥石・敲き石	輝石安山岩	13.1	7.8	3.6	520
20	台石・砥石	輝石安山岩	24.2	12.2	10.2	3660
21	剥片	黒曜石	2.3	1.8	0.7	2.1
22	未製品	黒曜石	2.6	1.9	1	3.5

第17表 H 8号住居址石類観察表

H 9号住居址



- 1層 暗褐色土 (10YR3/3)
炭化物微量。強粘性。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)
黄色シルト。強粘性。
(貼り床)
- 3層 黄褐色土 (10YR5/8)
上面焼け固い。粘性やや強。



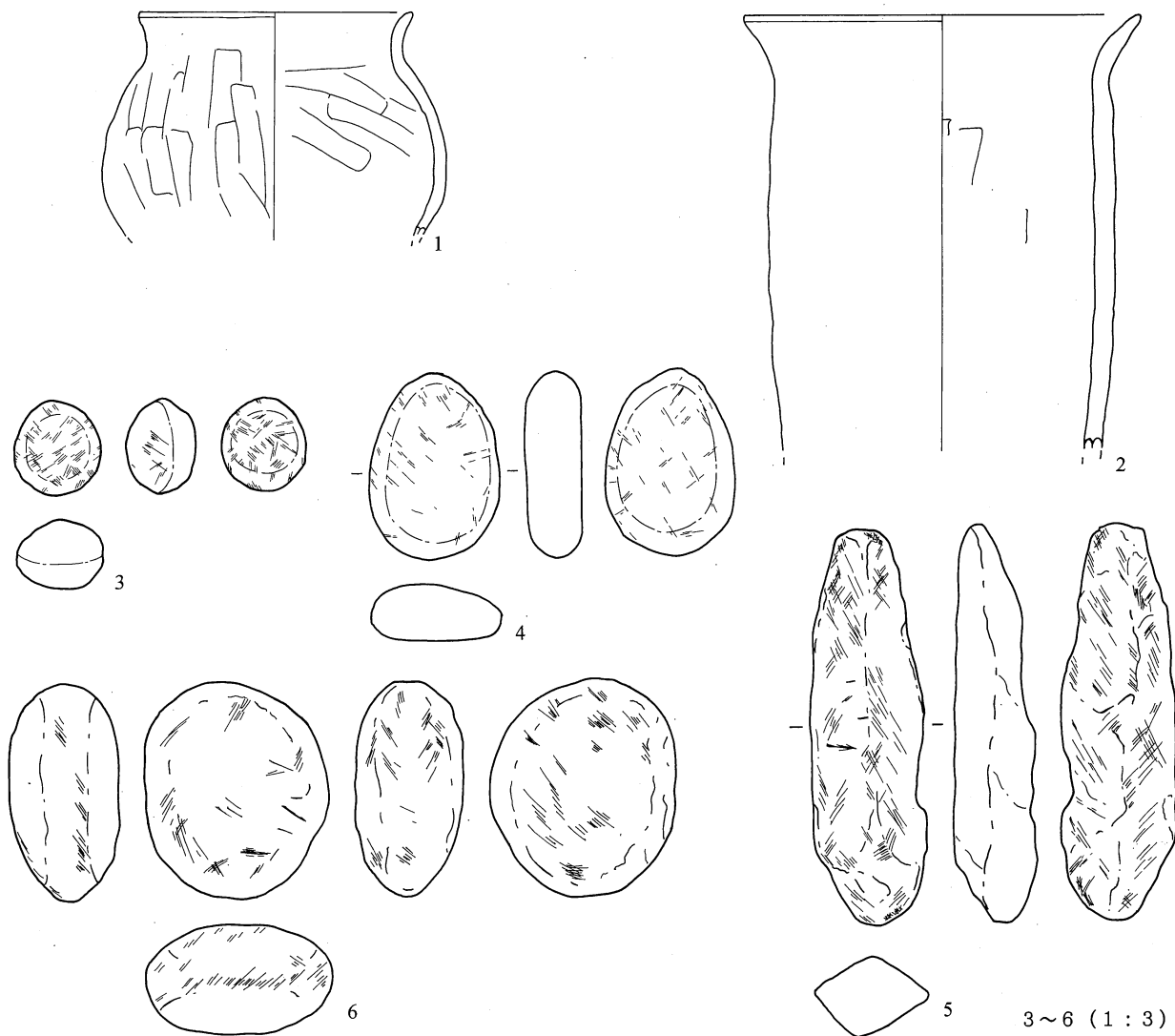
遺構はき-17グリッドに位置し、H12・D1に切られ東・南側は攪乱に破壊されている。覆土は炭化物を含む暗褐色土である。規模は確認できた最大で東西4.0m、南北4.9m、深さ5cm内外を測る。平面形は残存状況から隅丸方形と考えられる。壁高は非常に低く、北壁際に幅16cm、深さ5cm内外の周溝が認められる。床面は中央付近は黄褐色、周囲は黒褐色を示し、固く締まっている。ピットは床面上で2個確認できたが主柱穴であるかは不明である。また床面中央のやや北寄りに焼土が堆積した径23cm、深さ3cmほどの窪みが存在し、窪

第28図 H 9号住居址・遺物実測図

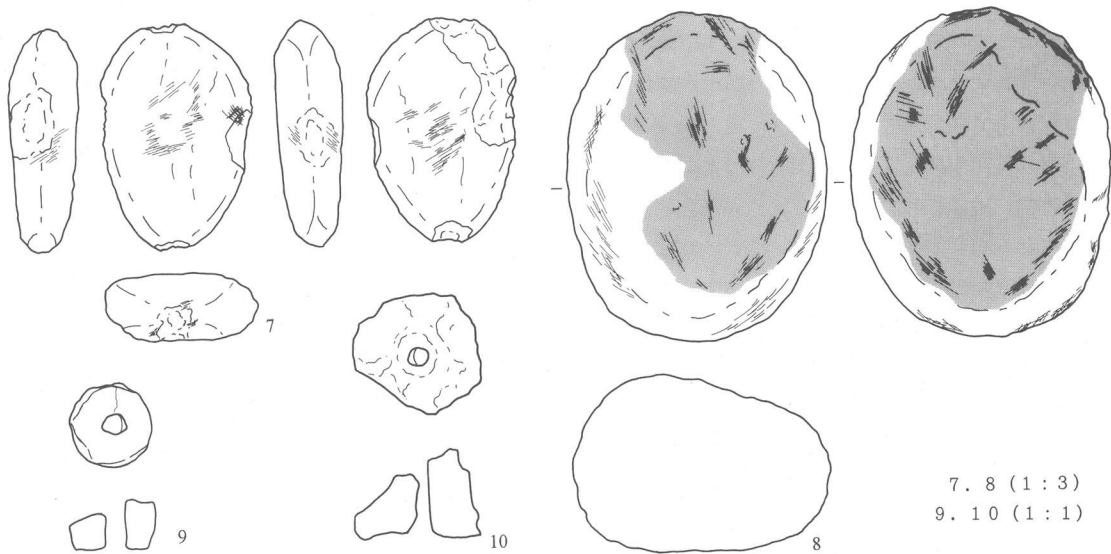
遺構はえ-19グリッドに位置し、部分的に大きく攪乱による破壊を受けている。規模は東西4.9m、南北4.8m、床面までの深さ10cm内外を測る。平面形は残存状況から隅丸方形と考えられる。壁高は低く、南壁付近を除き幅12~25cm、深さ8cm内外の周溝が認められる。床面はやや小石が認められるがほぼ平坦で固い。ピットは床面上で4個確認でき、P1、2は北側2本の支柱穴と考えられ、南側2本は確認できなかった。また住居址北側の床面上から僅かだが焼土の堆積が認められた。カマドは東壁のほぼ中央に構築されているが南袖は攪乱に破壊され、北袖及び火床が残存していた。袖は東壁から住居内に60cmほどのび、内壁側に補強と考えられる石材が埋め込まれていた。火床はほぼ円形に厚さ3cm程焼土化し、上面は固く焼け締まっていた。

遺物は土師器甕・壺、擦り石、敲き石、白玉が出土したが土器の大半は甕の小破片である。図示したのは10点である。1はやや胴丸の小型壺である。2は長胴甕で胴下半部は欠損している。最大径は口縁部にあり、残存する胴部はほぼ直線的に立ち上がる。3、4は安山岩製の擦り石、5は輝石安山岩製の擦り石、6は安山岩製の砥石、7は輝石安山岩製の砥石、8は安山岩製の台石である。9、10は滑石製の白玉である。

本住居址は7世紀代、古墳時代後期と考えられる。



第30図 H10号住居址遺物実測図(1)



第31図 H10号住居址遺物実測図(2)

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調 (外側) (内側)
1	土師器	甕	[15]	—	—	口辺横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面斜めヘラナデ	口縁～胴部破片	良	—— 鈍い黄橙色 —— 灰白色
2	土師器	甕	[22]	—	—	口辺横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁～胴部破片	良	—— 橙色 —— 明黄褐色

第19表 H10号住居址遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
3	振り石	安山岩	3.9	3.6	2.9	33.5	6	砥石	安山岩	8.9	7.7	4.5	400
4	振り石	安山岩	7.7	5.4	2.3	108.5	7	砥石	輝石安山岩	10.2	6.9	3.1	275
5	振り石	輝石安山岩	16.3	4.8	3.5	310	8	台石	安山岩	14.9	11.7	8.4	1830

第20表 H10号住居址石類観察表

番号	出土位置	種別	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	材質	色調
9	I区	白玉	7.5	13	4	1.8	滑石	明緑灰色
10	I区	白玉	14	19	3	5.8	滑石	明黄褐色

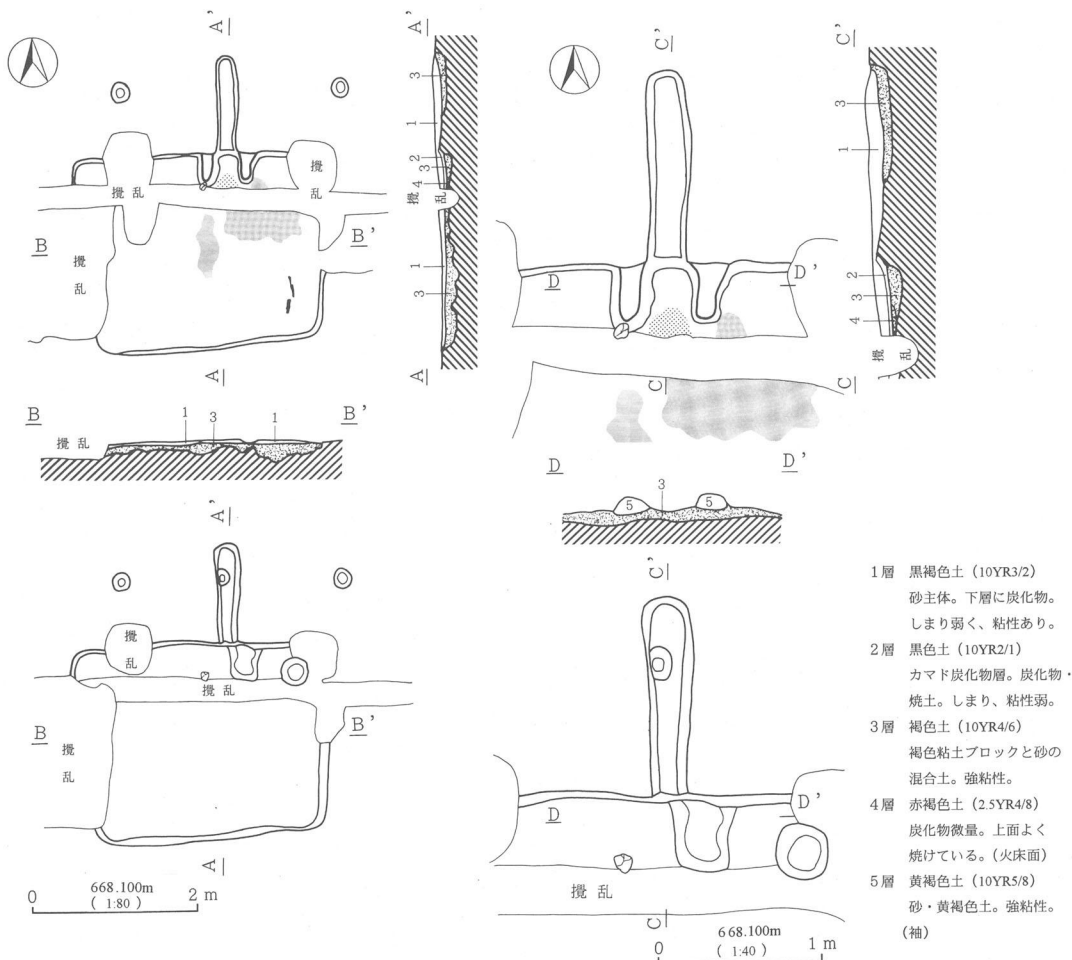
第21表 H10号住居址玉類観察表

H11号住居址

遺構はけー18グリッドに位置し、西及び東壁付近は攪乱に大きく破壊されている。覆土は砂主体で床面境に炭化物を含む黒褐色土層が存在する。規模は東西2.6m、南北2.3m、床面までの深さ5cm内外を測る。平面形は残存状況からやや東西に長い隅丸長方形と考えられる。床面はほぼ平坦で固く、中央から北東にかけて広く炭化物が認められた。ピットは床面上から確認できなかった。カマドは北壁中央にあり、袖及び火床の一部、煙道が残存していた。袖は住居内に火床を挟み込むように40cmほどのび、地山の土で構築されていた。火床は厚さ3cm程焼土化し、上面は固く焼けしまっていた。掘方は10~20cmの厚みで砂混じりの褐色土が埋め込まれ、上面を床面として利用していた。

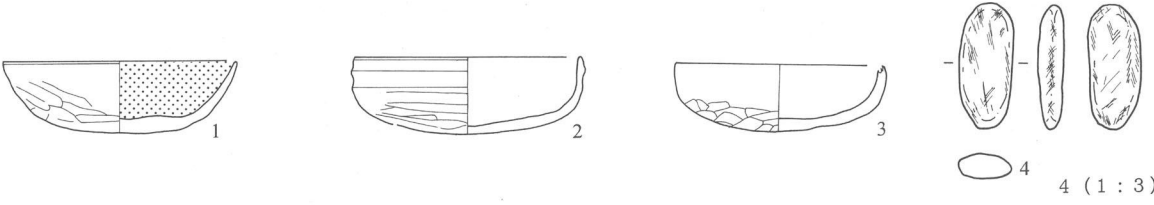
遺物は土師器の坏・甕、磨き石が出土したが土器の大半は小破片である。図示したのは4点である。1~3は坏で、1はやや平底気味の底部から直線に近い緩やかな曲線で立ち上がり、内面黒色処理を施す。2は平

らに近い丸底の底部から浅く内彎気味に立ち上がり、体部途中で2本の明瞭な稜を有する。3は丸底の底部から浅く直線的に口縁部に立ち上がる。4は安山岩製の磨き石である。7世紀前半と考えられる。



- 1層 黒褐色土 (10YR3/2)
砂主体。下層に炭化物。
しまり弱く、粘性あり。
- 2層 黒色土 (10YR2/1)
カマド炭化物層。炭化物・
焼土。しまり、粘性弱。
- 3層 褐色土 (10YR4/6)
褐色粘土ブロックと砂の
混合土。強粘性。
- 4層 赤褐色土 (2.5YR4/8)
炭化物微量。上面よく
焼けている。(火床面)
- 5層 黄褐色土 (10YR5/8)
砂・黄褐色土。強粘性。
(袖)

第32図 H11号住居址実測図



第33図 H11号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調 (外側) (内側)
1	土師器	坏	13.4	丸底ぎみ	4.1	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ・黒色処理	60	良	明赤褐色 黒色
2	土師器	坏	13	丸底	4.4	口辺横ナデ 内外面やや摩耗 外面ヘラ削り後ナデ 内面ミガキ	50	良	灰白色 鈍い黄橙色
3	土師器	坏	12	丸底	3.8	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面横ナデ	40	良	橙色 橙色

第22表 H11号住居址遺物観察表

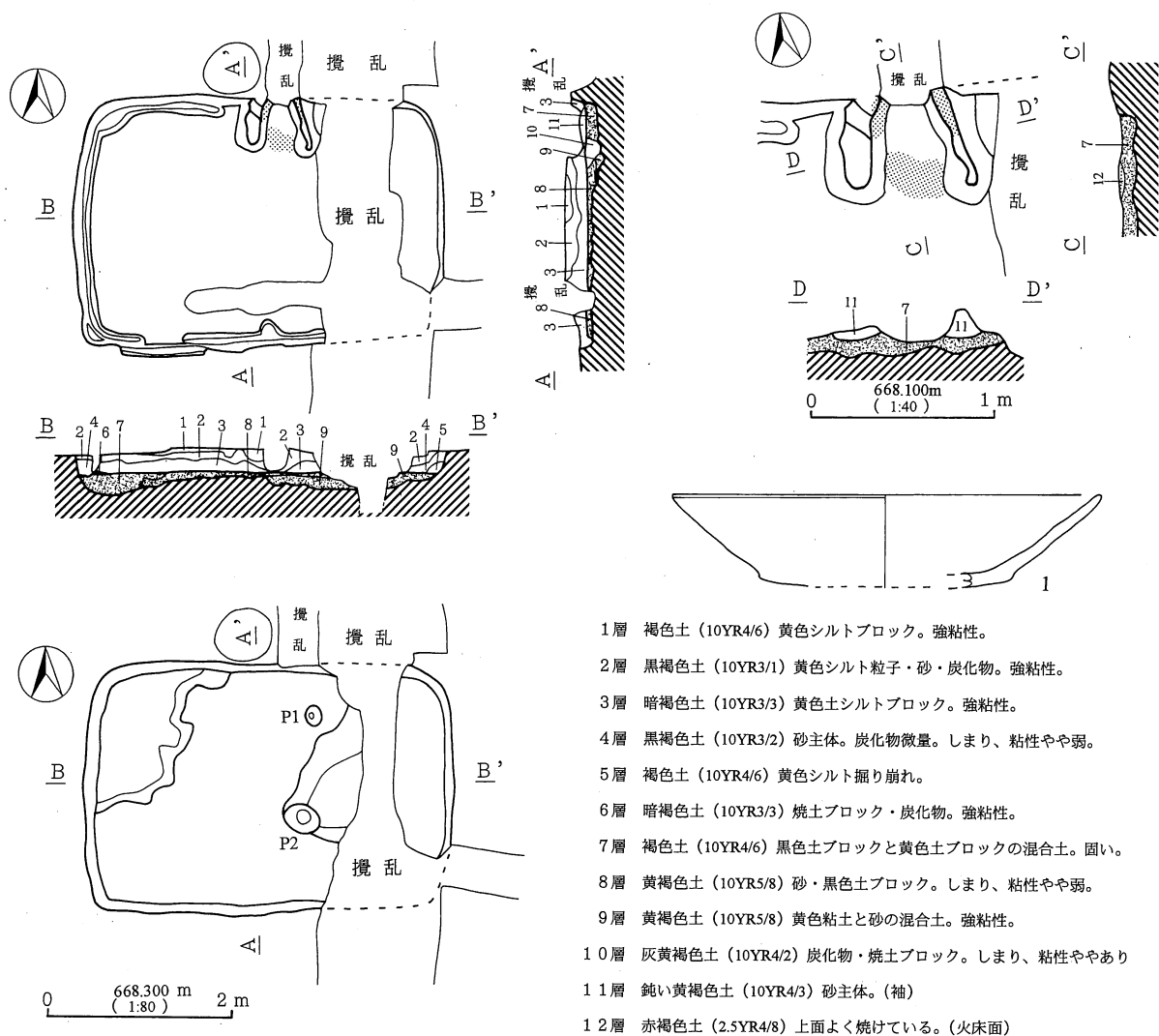
番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
4	磨き石	安山岩	5.3	2.3	1.1	21.5

第23表 H11号住居址石類観察表

H12号住居址

遺構はき-17グリッドに位置し、H9を切る。住居址東側は攪乱に大きく破壊されている。覆土は黄色シルトブロックを含む褐色土、黒褐色土、暗褐色土である。規模は東西3.9m、南北2.7m、深さ30cm内外を測る。平面形はやや東西に長い隅丸長方形である。壁面は固く安定し、西壁を除き幅15cm内外、深さ10cm内外の周溝が認められる。床面はほぼ平坦で固い。ピットは床面上には存在しなかった。カマドは北壁中央に構築されているが、煙道部分は南北方向にのびる攪乱に破壊され、袖及び火床が残存していた。袖は北壁から火床を挟み込むように住居内に50cmほどのび、内壁は火を受け固く焼け締まっていた。火床には厚さ4cmほどの焼土が存在した。掘方は5~12cmの厚みで強粘性の黄褐色土が埋め込まれ、この上面を床面として利用していた。

遺物は土師器の坏、甕が出土したが大半は小破片である。図示したのは坏1点である。本住居址は遺物の形状、その他の破片から古墳時代と考えられる。

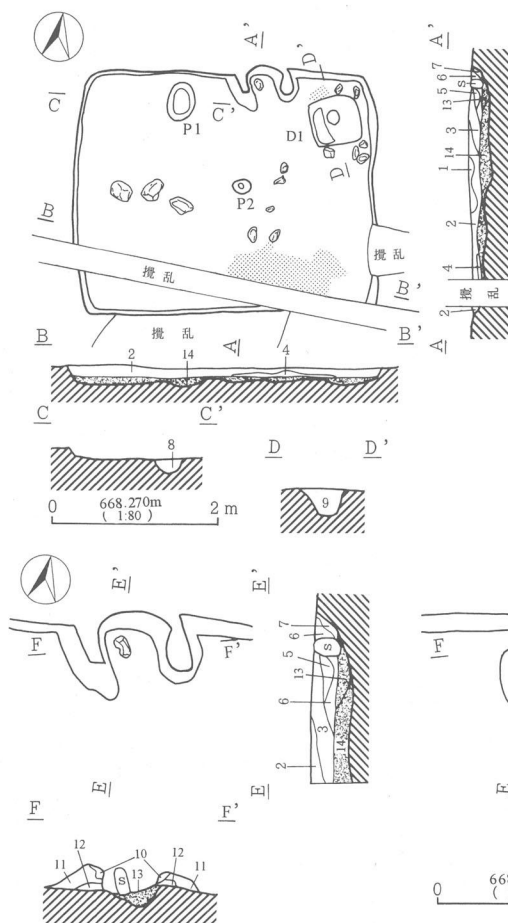


第34図 H12号住居址・遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調 (外側) (内側)
1	土師器	坏	[23.6]	-	-	内外面やや摩耗	口縁～体部破片	良	----- 橙色 橙色

第24表 H12号住居址遺物観察表

H13号住居址



- 1層 黒褐色土 (10YR2/3) シルトブロック。粒子密。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/3) シルトブロック多。黒色土ブロック。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/3) シルト・黒色土僅か。
- 4層 暗赤褐色土 (2.5YR3/6) 焼土多量。
- 5層 暗褐色土 (10YR3/4) シルトブロック・焼土・炭化物多。
- 6層 暗褐色土 (10YR3/4) シルトブロック・焼土・炭化物 5 < 6。
- 7層 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) シルトブロック・炭化物。
- 8層 黒褐色土 (10YR2/3) シルトブロック。しまりややあり。
- 9層 黒褐色土 (10YR2/3) シルトブロック 8 > 9。
- 10層 暗赤褐色土 (2.5YR3/6) 焼土多量。焼けている。
- 11層 暗褐色土 (10YR3/4) シルトブロック・炭化物。しまりあり。
- 12層 暗褐色土 (10YR3/3) シルトブロック・炭化物。しまりあり。
- 13層 黒褐色土 (10YR2/3) 炭化物。粘性あり。
- 14層 暗褐色土 (10YR3/4) シルト主体。黒色土多。しまりあり。



遺構はえー26グリッドに位置する。本住居址は工事計画の都合上北側の大半をH11年度、南側の一部をH13年度に調査を行った。覆土は黄色シルトを含む暗褐色土、黒褐色土である。規模は東西3.5m、南北2.8m、床面までの深さ20cm内外を測る。平面形はやや東西に長い隅丸方形である。

第35図 H13号住居址・遺物実測図

壁は固く安定しており、周溝は認められない。床面はほぼ平坦で固い。床面上からはピット2個と北東コーナー付近に土坑1基が認められ、土坑北側及び床面の南側に焼土の散布が認められた。カマドは北壁中央にあり、袖及び火床が残存していた。袖は強粘性の地山土でつくられ、火床を挟み込むように北壁から住居内に50cmほどのび、内壁は火を受け固く焼け締まっていた。火床付近には灰の堆積が認められ、やや北壁寄りに軽石製の支脚が立っていた。掘方は15cm内外の厚みで地山の黄色シルトに黒色土を含む暗褐色土が埋め込まれ、上面を床面として利用していた。

遺物は底部多孔の甌片が出土したのみで、時期の断定はできなかった。

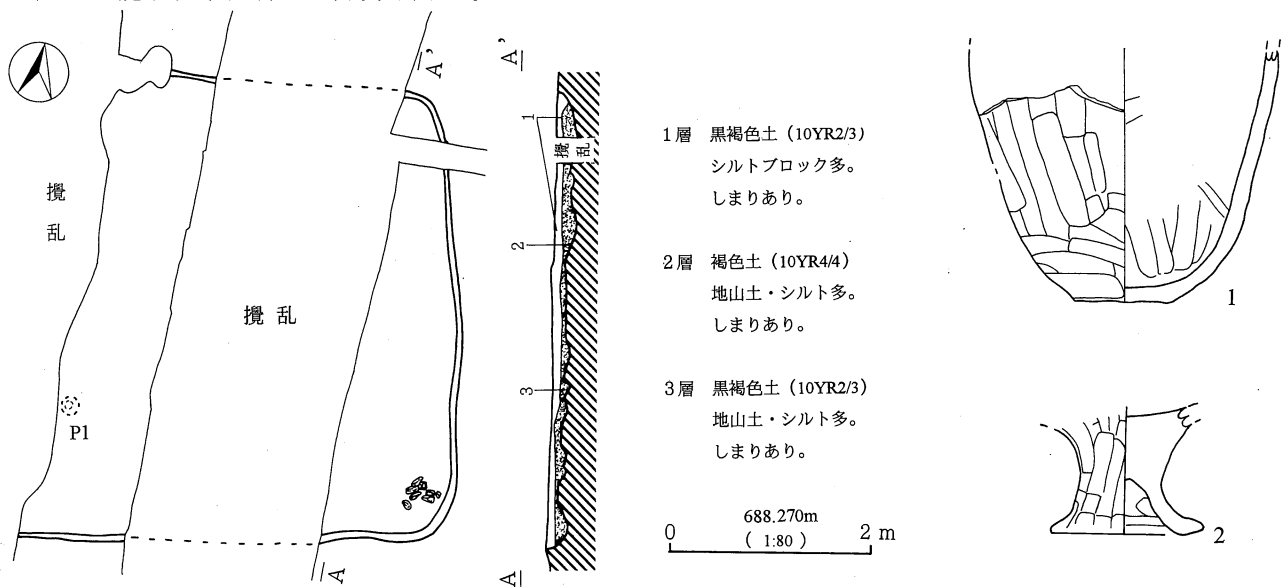
番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調 (外側) (内側)
1	土師器	甌	-	6	-	外面ヘラ削り 底部多孔 内面ヘラナデ	底部破片	良	----- 鈍い橙色 橙色

第25表 H13号住居址遺物観察表

H14号住居址

遺構はか-25グリッドに位置し、遺構の多くが攪乱に破壊されている。覆土は黄色シルトを多く含む黒褐色土である。規模は残存部の最大で東西4.0m、南北は4.3m、床面までの深さ10cm 内外を測る。平面形は残存状況から隅丸方形と考えられる。床面はほぼ平坦で固く、南東コーナー付近に編み物石と思われる石が集石となっていた。ピット、カマドは認められなかった。掘方は全体に凹凸があり、厚さ5~15cmで地山の黄色シルトを主体とする褐色土が埋め込まれ、この上面を床面として利用していた。

遺物は土師器の甕・高坏が出土した。図示したのは2点である。1は甕の底部から胴部にかけての破損品で外面縦方向のヘラ削り、内面ヘラナデを施す。2は脚部の短い高坏脚部で外面縦方向のヘラ削り、内面ヘラナデを施す。本住居址は古墳時代と考えられる。



第36図 H14号住居址・遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調 (外側) (内側)
1	土師器	甕	-	5.2	-	外面縦、底部周辺斜めヘラ削り 内面ヘラナデ	底部~胴部破片	良	鈍い赤褐色 鈍い橙色
2	土師器	高坏	-	7.7	-	脚部外面縦ヘラ削り 裾部横ナデ 内面ヘラナデ	脚部のみ	良	鈍い赤褐色 赤灰色

第26表 H14号住居址遺物観察表

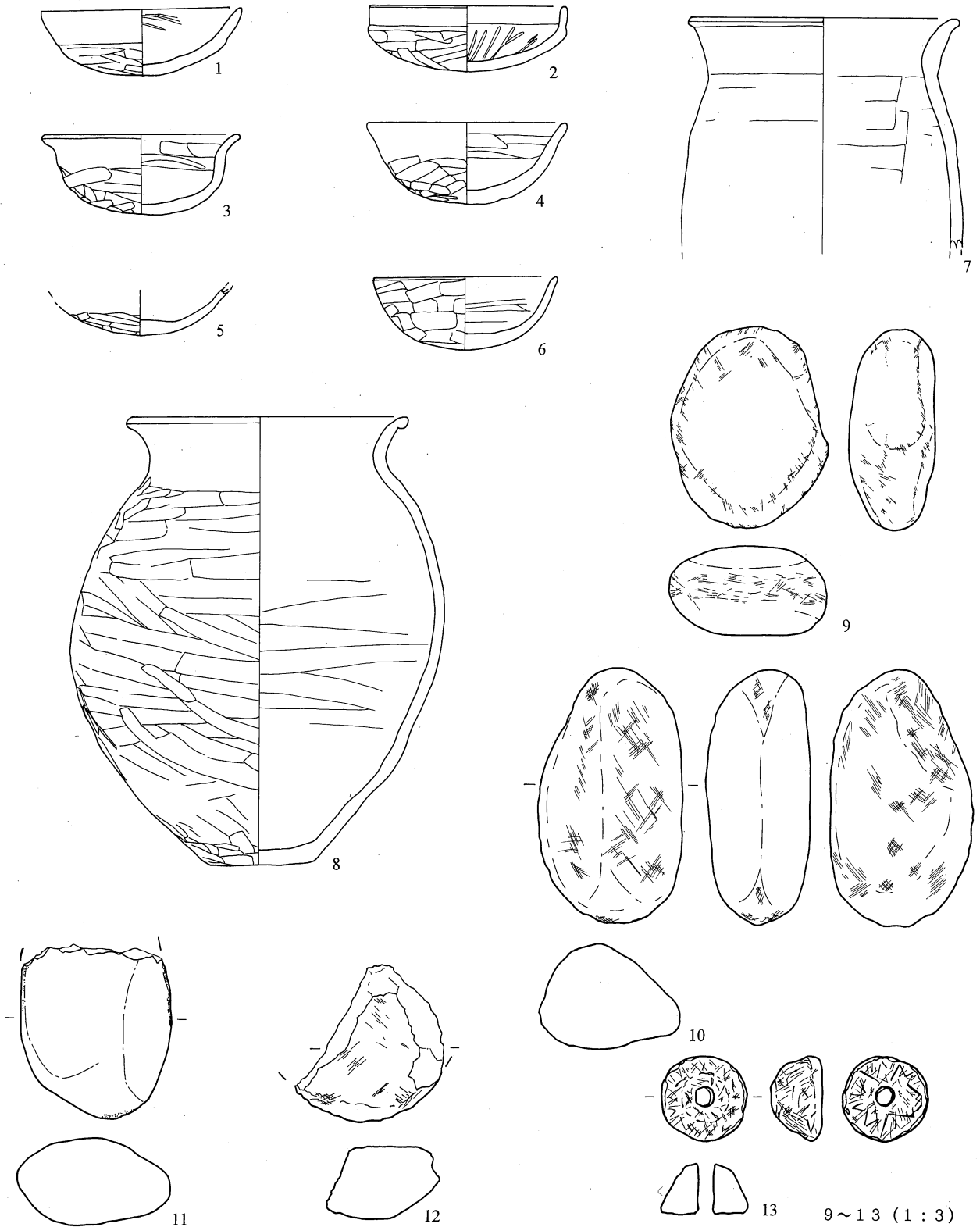
H15号住居址

遺構はお-29グリッドに位置し北東コーナー付近は攪乱に破壊されている。覆土はシルト質の暗褐色土を主体とする。規模は東西5.8m、南北4.1m、床面までの深さ25cm を測る。平面形は隅丸長方形である。壁はほぼ直上し固く安定している。床面はほぼ平坦で固く、ピット5個が確認できた。このうちP2、3は支柱穴、P4は入り口部のピットと考えられる。カマドは北壁中央にあり、袖の一部及び火床が残存していた。袖は強粘性の地山土でつくられ、北壁から住居址内に30cmほどのびていた。火床には厚さ5cmほどの焼土が存在した。カマド前には火を受けもろくなった長方形の石が横たわっていた。カマドの焚き口部の天井石であった可能性が考えられる。また、カマド西側には径50cm、深さ30cmの土坑が存在し、土師器の坏が数個体出土した。掘方は地山のシルトを主体とする黄褐色土が薄く埋め込まれ上面を床として利用していた。

遺物は土師器の坏・甕、擦り石、敲き石、台石、紡錘車が出土した。図示したのは13点である。1~6は丸底の坏である。1、2は明瞭な稜を有し、1は稜から開き気味に、2は短く直上し口縁に至る。3、4はヘルメット型で口縁間近で外反する。5、6は丸底の底部から丸みを持って立ち上がる。7は長胴甕の口縁

から胴上半部にかけての破片である。8は胴丸の甕である。9、10は輝石安山岩製の擦り石、12は輝石安山岩製の台石、13は滑石製の紡錘車である。

本住居址は6世紀前半、古墳時代後期と考えられる。



第38図 H15号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調 (外側) (内側)
1	土師器	坏	13.6	丸底	4.5	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面摩耗、ややナデ痕	70	良	灰褐色 橙色
2	土師器	坏	13.2	丸底	4.5	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面放射状ミガキ	70	良	鈍い橙色 鈍い橙色
3	土師器	坏	13.3	丸底	5.4	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	100	良	鈍い橙色 鈍い橙色
4	土師器	坏	13.6	丸底	5.5	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	100	良	鈍い橙色 鈍い橙色
5	土師器	坏	—	丸底	—	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	40	良	橙色 橙色
6	土師器	坏	12.6	丸底	4.9	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	60	良	淡赤褐色 淡赤褐色
7	土師器	甕	[18.5]	—	—	口辺横ナデ 外面やや摩耗、縦ヘラ削り 内面横ヘラナデ	口縁～胴部破片	良	鈍い橙色 明赤褐色
8	土師器	甕	19.1	7.6	30.5	口辺横ナデ 外面横ヘラ削り後ナデ 内面ヘラナデ	85	良	鈍い黄褐色 明黄褐色

第27表 H15号住居址遺物観察表

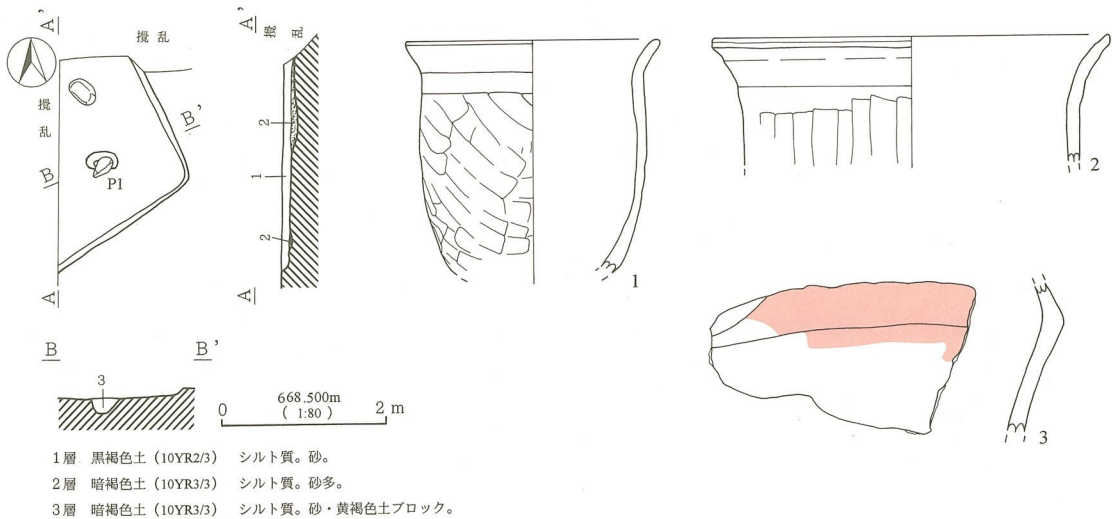
番号	器種	石材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)
9	擦り石	輝石安山岩	10.1	8	4.4	495
10	擦り石	輝石安山岩	12.9	7.1	5.3	605
11	敲き石	輝石安山岩	8.7	7.7	4.4	430

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)
12	台石	輝石安山岩	7.9	7.7	4.2	238

番号	器種	石材	径(cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量(g)
13	紡錘車	滑石	最大4.4	2.6	0.75	64

第28表 H15号住居址石類観察表

H16号住居址



第39図 H16号住居址・遺物実測図

遺構はか-29グリッドに位置し、大半が攪乱による破壊を受け、南東コーナー付近が僅かに残存していた。確認できた規模は南壁1.9m、東壁1.4m、床面までの深さ13cm 内外である。床面上ではピットは1個確認できた。炉などの施設は存在しなかった。掘方はシルト、砂を含む暗褐色土が埋め込まれ上面を床面として利用していた。

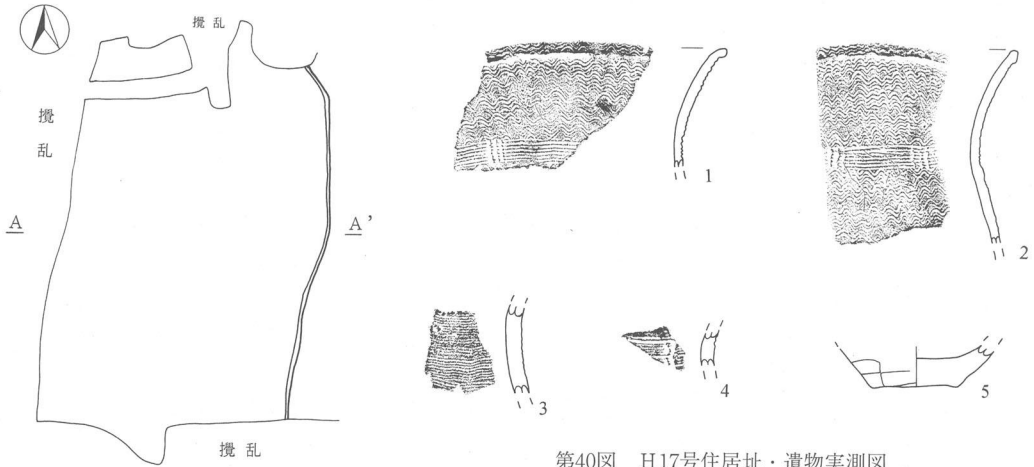
遺物は床面近くから弥生式土器、土師器が出土した。1は土師器の甕で底部は欠損している。外面斜め方向のヘラ削りを施す。2は土師器甕の口縁である。3は弥生式土器で外面赤色塗彩された壺の体部破片と思われる。本住居址からは弥生式土器、土師器の時期の異なる遺物が出土し、炉またはカマドの確認もできな

かったことから時期の確定ができなかった。

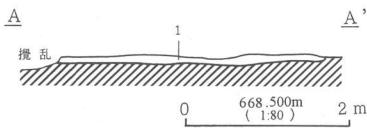
番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調 (外側) (内側)
1	土師器	甕	15.1	—	—	口辺横ナデ 外面斜めヘラ削り 内面ヘラナデ	30	良	鈍い褐色 鈍い橙色
2	土師器	甕	[24.2]	—	—	口辺横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁破片	良	鈍い褐色 鈍い赤褐色
3	弥生式土器	壺	—	—	—	外面赤色塗彩	胴部破片	良	赤色 鈍い黄褐色

第29表 H16号住居址遺物観察表

H17号住居址



第40図 H17号住居址・遺物実測図



1層 黒褐色土 (10YR2/3) シルト質。砂・炭化物。

遺構はこ-29グリッドに位置する。周辺は攪乱によって大半が破壊され、東側において僅かな掘方と思われる掘り込みが認められた。

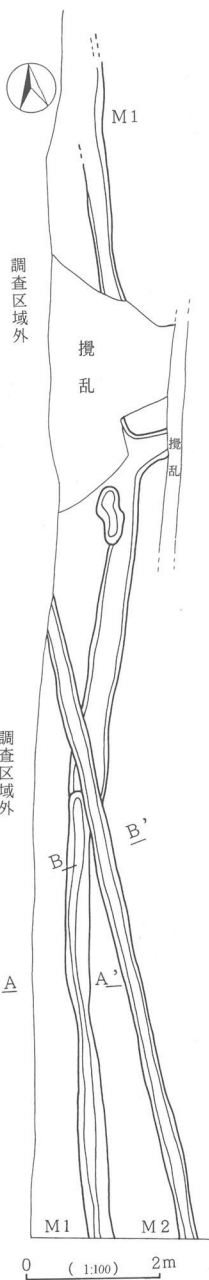
遺物は弥生式土器片が出土した。1、2は甕の口縁破片で口辺、体部外面に櫛描波状文、頸部簾状文、内面ハケナデ後横方向の磨きを施し、口縁は二重口縁である。3は器種不明の破片で横方向の条線を施す。4は壺の頸部破片と思われる外面簾状文、赤色塗彩を施す。5は壺または甕の底部である。

本遺構は一部に浅い掘り込みが認められる程度で、住居址とは断定できないが、周辺から弥生式土器が出土することから、弥生時代の遺構である可能性は推察できる。

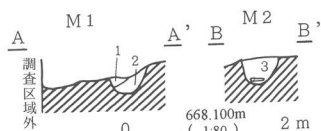
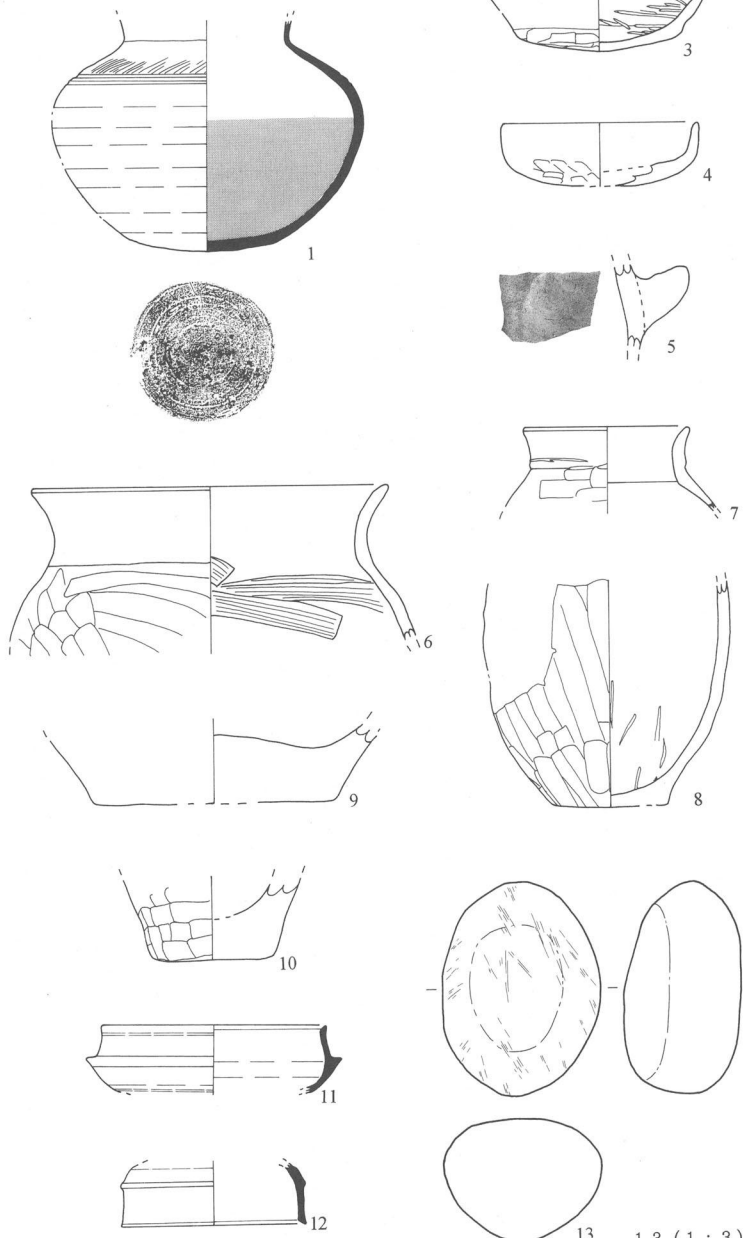
番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調 (外側) (内側)
1	弥生式土器	甕	—	—	—	口辺外面櫛描波状文 頸部簾状文 2と同一団体の可能性あり	口縁破片	良	暗赤褐色 灰褐色
2	弥生式土器	甕	—	—	—	口辺・胴部外面櫛描波状文 頸部簾状文 1と同一の可能性あり	口縁破片	良	暗赤褐色 灰褐色
3	弥生式土器	—	—	—	—	外面横櫛描文	頸部破片	良	鈍い赤褐色 赤褐色
4	弥生式土器	壺	—	—	—	頸部簾状文 外面赤色塗彩	頸部破片	良	赤色 明黄褐色
5	弥生式土器	—	—	5.2	—	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部破片	良	鈍い赤褐色 鈍い橙色

第30表 H17号住居址遺物観察表

第2節 溝状遺構

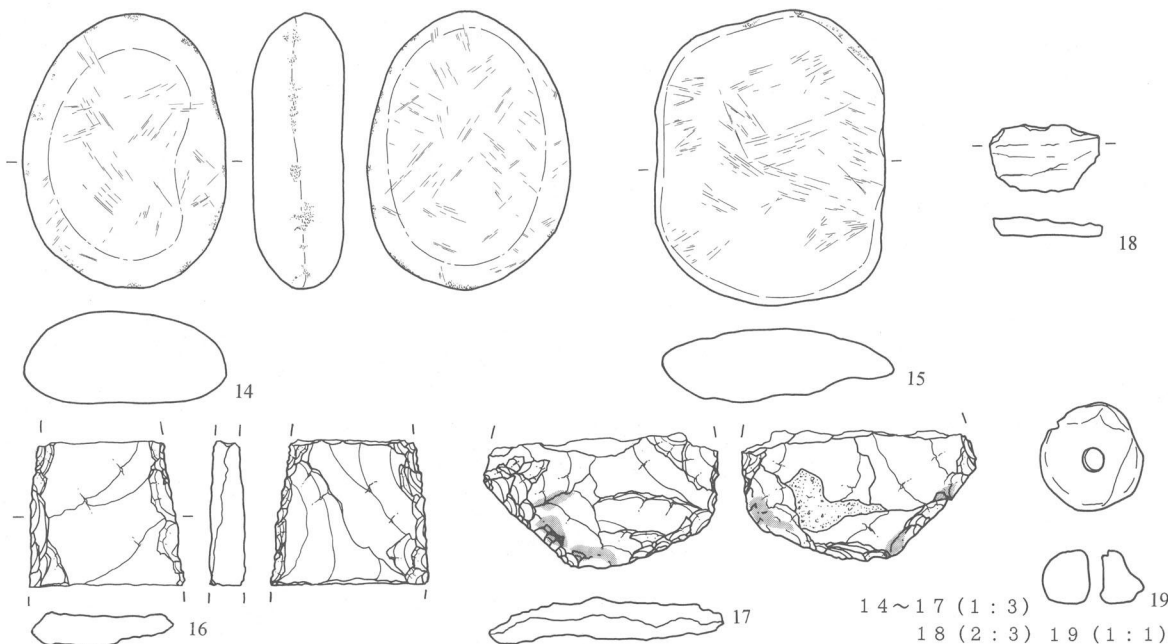


- 1層 黄褐色土 (10YR5/6)
黄色シルト主体。砂。しまり、粘性ややあり。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/2)
黒色ブロック・黄色ブロック・大粒砂。
しまり、粘性あり。
- 3層 褐色土 (10YR4/6)
褐色土・黒色土・水田耕作土。
しまり、粘性あり。



第41図 M1・2号溝状遺構実測図

第42図 M1号溝状遺構遺物実測図(1)



第43図 M1号溝状遺構遺物実測図(2)

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外側) (内側)
1	須恵器	壺	-	8.3	-	ロクロ横ナデ 肩部沈線2本・斜め条線 底部・体部外面回転ヘラ削り 内面自然釉付着	60	良好	灰白色 黄灰色
2	土師器	坏	[14.5]	丸底	5.2	口辺横ナデ 外面摩擦やや削り痕残 内面ヘラナデ	70	良	灰白色 灰白色
3	土師器	坏	[13.8]	丸底	-	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面摩擦一部ミガキ痕残	50	良	鈍い橙色 鈍い橙色
4	土師器	坏	[12]	丸底	-	口辺横ナデ 外面ヘラ削り	20	良	鈍い橙色 鈍い橙色
5	土師器	-	-	-	-	とって張り付け	破片	良	鈍い橙色 鈍い橙色
6	土師器	甕	[21.7]	-	-	口辺横ナデ 外面横・斜めヘラ削り 内面櫛目状工具横ナデ	口縁~胴部破片	良	鈍い橙色 鈍い橙色
7	土師器	壺	[10.3]	-	-	口辺横ナデ 外面横ヘラ削り	口縁~胴部破片	良	鈍い橙色 灰褐色
8	土師器	甕	-	7	-	外面縦・底部ヘラ削り、底部周辺特に強い。内面ヘラ削り	底部~胴部	良	橙色 鈍い橙色
9	土師器	甕	-	14.6	-	土器表面摩擦、調整痕不鮮明	底部	良	浅橙色 灰白色
10	土師器	甕	-	6.5	-	外面・底部ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部~胴部	良	鈍い橙色 黒褐色
11	須恵器	坏	[13.8]	-	-	ロクロ横ナデ	受部破片	良好	灰色 灰色
12	須恵器	ふた	[11.3]	-	-	ロクロ横ナデ	口縁破片	良好	灰色 灰色

第31表 M1号溝状遺構遺物観察表

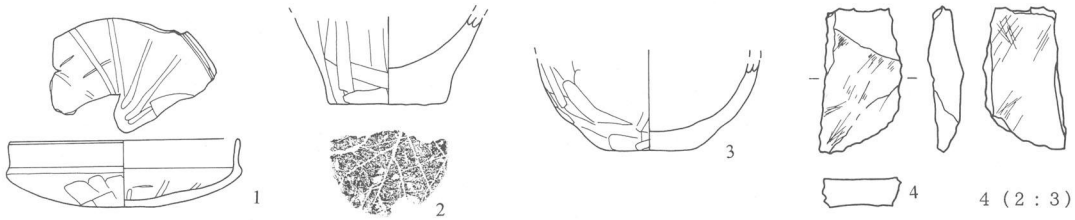
番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
13	擦り石	輝石安山岩	9.7	7.3	5.4	540
14	擦り・蔽き石	輝石安山岩	11.9	9.8	3.8	550
15	擦り・蔽き石	輝石安山岩	12.7	10	3	570

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
16	打製石斧	輝石安山岩	6.2	6.7	1.6	98
17	打製石斧	輝石安山岩	5.7	10	1.7	116
18	剥片	千枚岩	1.4	2.4	0.4	2

第32表 M1号溝状遺構石類観察表

番号	出土位置	種別	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	材質	色調
19	I区	白玉	7.5	16	3.5	2.5	滑石	浅黄色

第33表 M1号溝状遺構玉類観察表



第44図 M2号溝状遺構遺物実測図

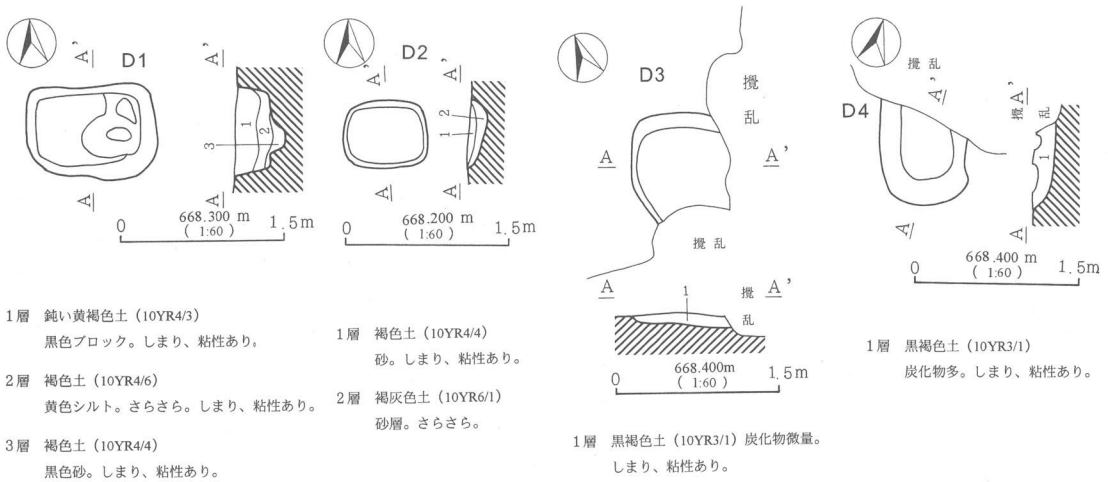
番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調 (外側/内側)
1	土師器	坏	[14]	丸底	4	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面みこみ部放射状ミガキ	40	良	褐灰色 (外側) 灰黄褐色 (内側)
2	土師器	甕	-	7.2	-	外面ヘラ削り 底部木葉痕 内面ヘラナデ	底部破片	良	明赤褐色 鈍い橙色
3	土師器	鉢	-	5.5	-	外面・底部ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部～体部破片	良	明褐色 鈍い橙色

第34表 M2号溝状遺構遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)
4	不明	硬質砂岩	3.3	1.9	0.8	5.2

第35表 M2号溝状遺構石類観察表

第3節 土坑

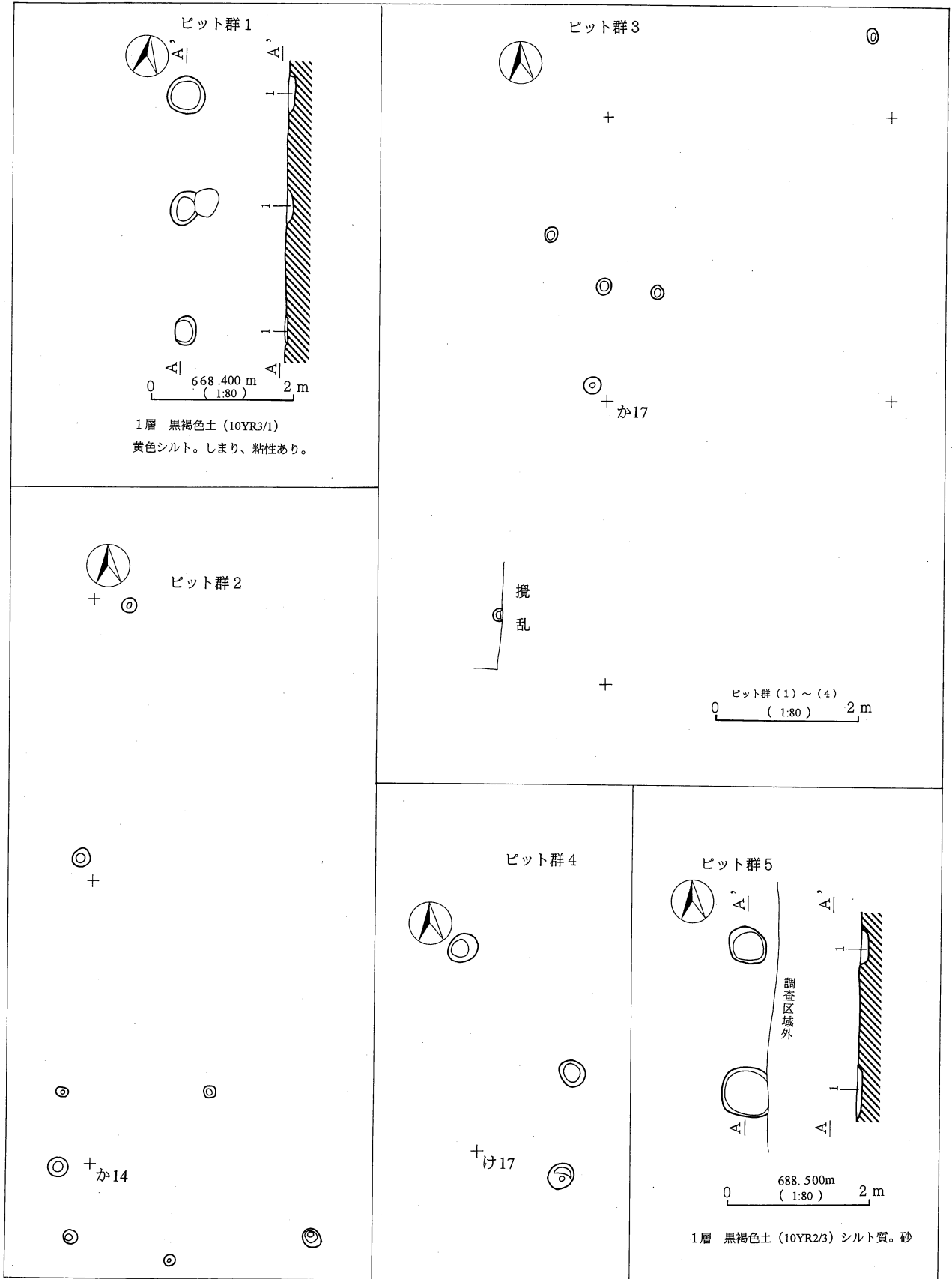


第45図 土坑実測図

遺構名	検出位置	平面形	東西(cm)	南北(cm)	深さ(cm)	出土遺物	重複遺構
D 1	き-17	長方形	120	78	48	-	H 9
D 2	く-17	方形	78	66	18	-	
D 3	え-16	[方形]	[90]	[90]	13	-	東・南攪乱
D 4	え-20	[長方形]	52	[84]	18	-	北攪乱 H10

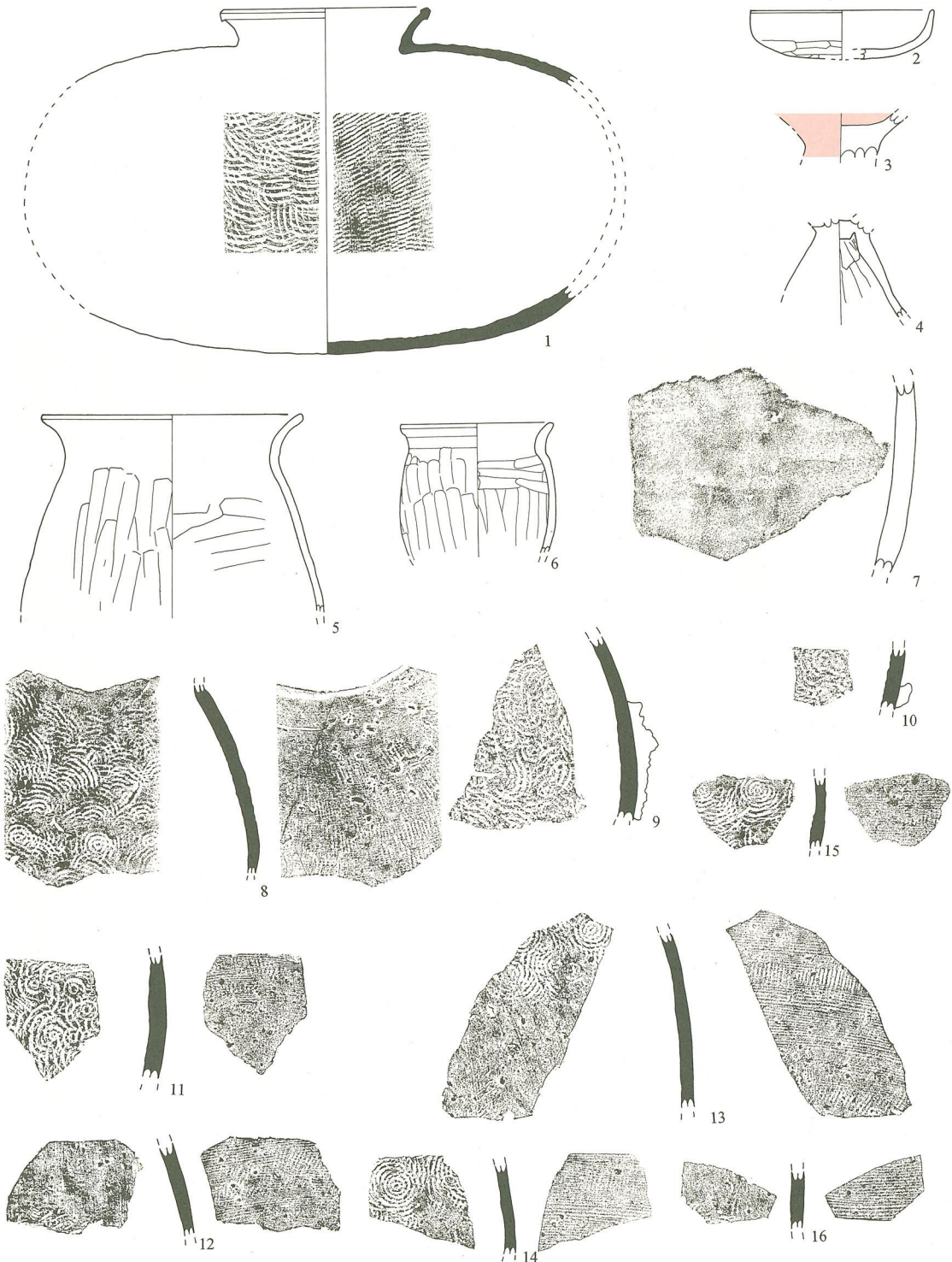
第36表 土坑観察表

第4節 ピット群

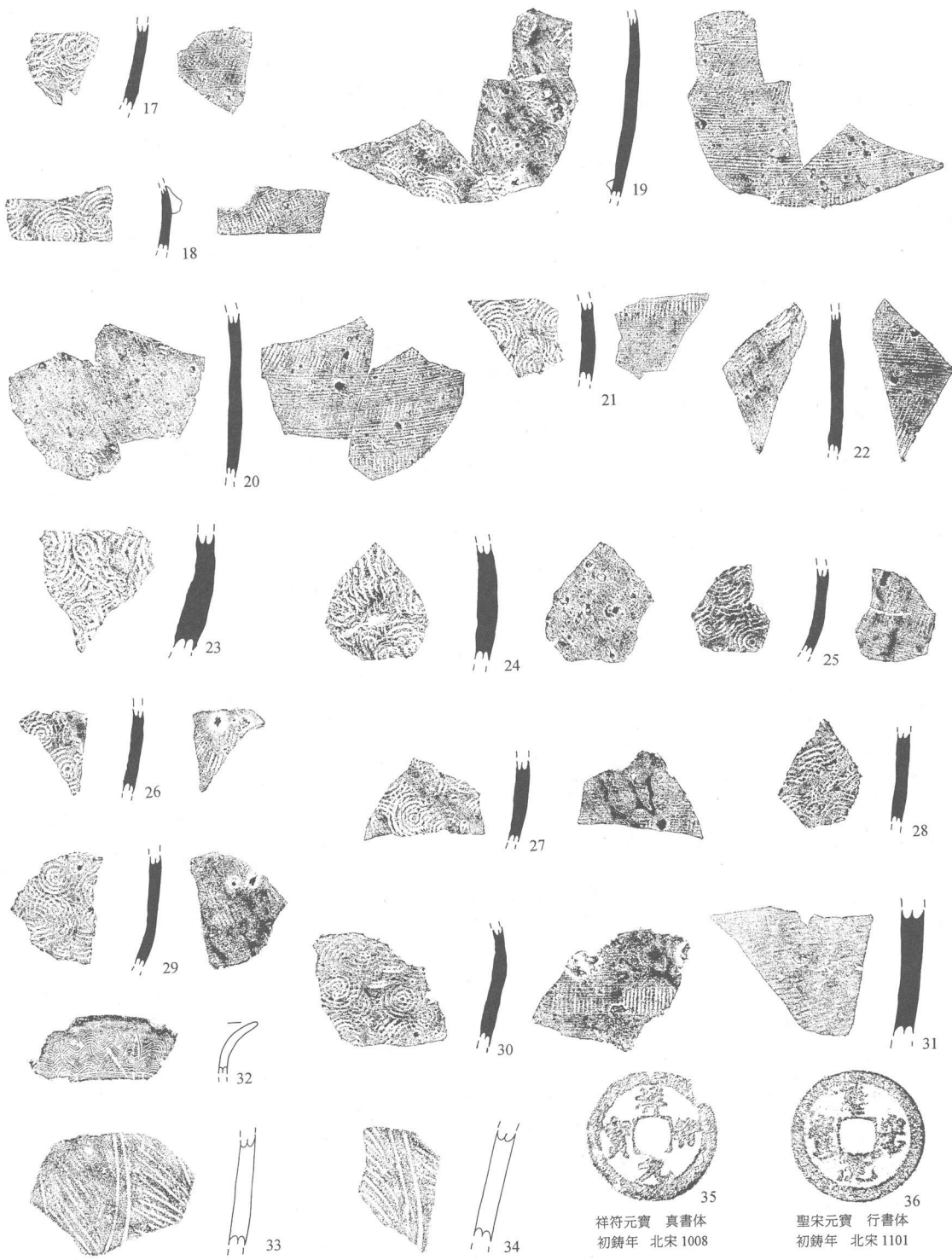


第46図 ピット群実測図

第5節 遺構外遺物



第47図 遺構外遺物実測図(1)

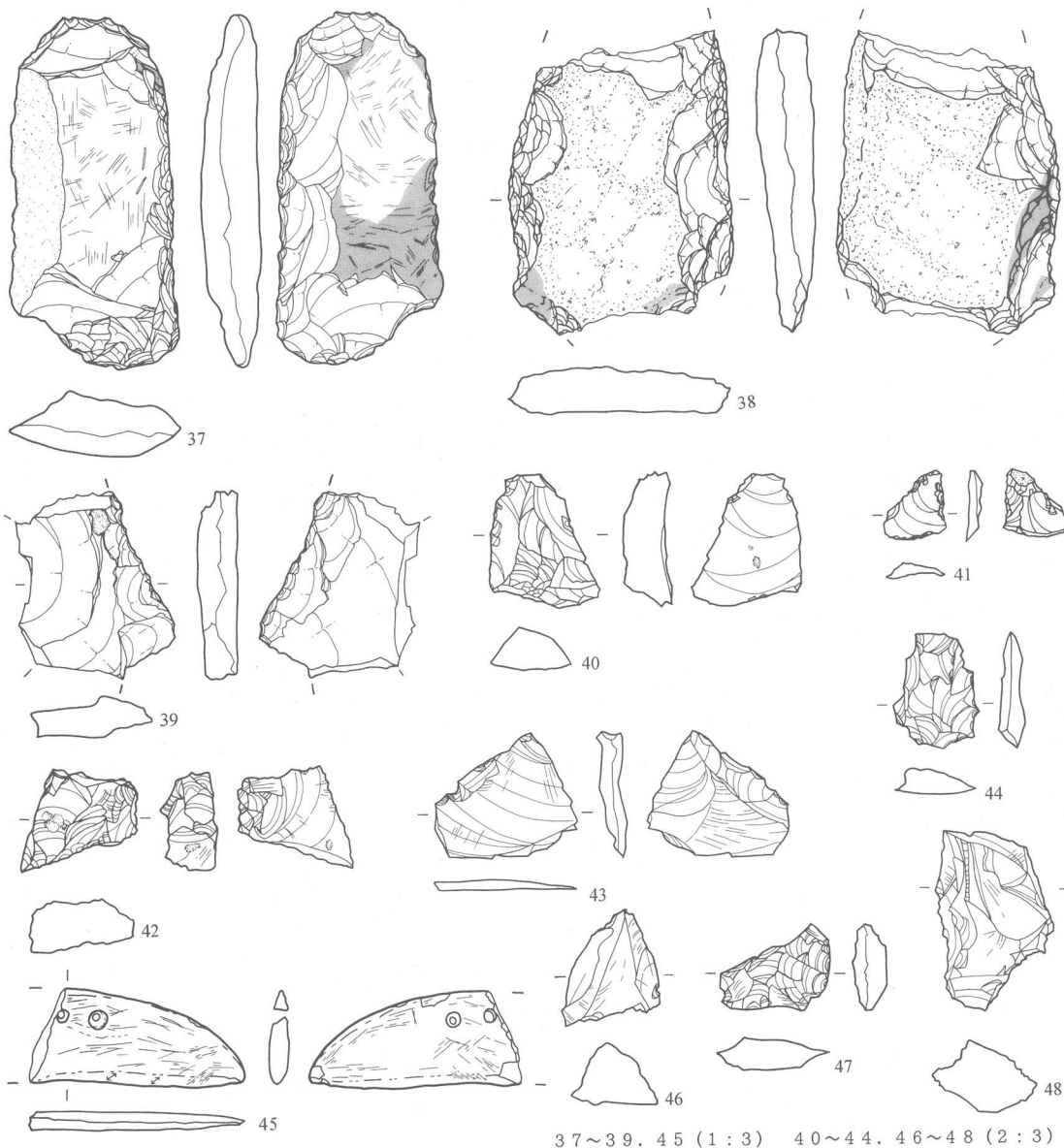


35 祥符元寶 真書體
初鑄年 北宋 1008

36 聖宋元寶 行書體
初鑄年 北宋 1101

35. 36 (1:1)

第48圖 遺構外遺物実測図(2)



37~39. 45 (1:3) 40~44. 46~48 (2:3)

第49図 遺構外遺物実測図(3)

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調 (外側) (内側)
1	須恵器	横瓶	[15.2]	-	-	ロクロ横ナデ 口縁張り付け 外面自然釉付着	50	良好	----- 灰色 ----- 灰色
2	土師器	坏	[13.1]	-	-	口辺横ナデ 外面ヘラ削り	20	良	----- 橙色 ----- 鈍い橙色
3	弥生式土器	高坏	-	-	-	内外面赤色塗彩	坏接合部破片	良	----- 赤色 ----- 赤色
4	土師器	高坏	-	-	-	脚部外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	脚部破片	良	----- 灰褐色 ----- 灰褐色
5	土師器	甕	[18.7]	-	-	口辺横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面横ヘラナデ	口縁~胴部破片	良	----- 明赤褐色 ----- 鈍い赤褐色
6	土師器	甕	[11]	-	-	口辺横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面横・縦ヘラナデ	口縁~胴部破片	良	----- 鈍い橙色 ----- 浅黄褐色

第37表 遺構外遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)
37	打製石斧	輝石安山岩	16.4	7.9	3.1	430
38	打製石斧	輝石安山岩	14.2	10.6	2.8	530
39	打製石斧	輝石安山岩	9.6	7.45	1.9	138
40	剥片	黒曜石	3.1	2.7	1.1	6.7
41	剥片	黒曜石	1.7	1.5	0.4	0.5
42	石核	黒曜石	2.4	2.7	1.4	7.7

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)
43	剥片	黒曜石	3	3.35	0.7	3.6
44	剥片	黒曜石	2.7	2	0.6	2.1
45	石包丁	凝灰岩	4.6	10	1	49.5
46	石核	黒曜石	2.8	2.3	1.4	7.1
47	剥片	黒曜石	2	2.6	0.8	2.9
48	石核	黒曜石	4.7	2.8	1.5	15.2

第38表 遺構外石類観察表

ま と め

本遺跡は佐久市内を二分する千曲川左岸に広がる標高668m内外の氾濫源沖積地に所在し、千曲川との比高差は10m内外を測る。遺跡の周辺では近年発掘調査の件数も増し、中道遺跡北東方向に位置する寺添遺跡、市道遺跡、宮添遺跡等の調査が行われ、古墳時代から平安時代の遺構が確認されている。

今回、中道遺跡Ⅱの調査が行われ、弥生時代から古墳時代後期の遺構及び縄文時代から古墳時代後期の遺物が確認できた。竪穴住居址は弥生時代1軒、古墳時代10軒、古墳時代以降4軒、時期の確定ができないもの2軒という調査結果であった。遺構の分布は開発地域の北東付近に集中し、片貝川が流れる西及び南の地域からは認めることができなかった。また、近年の発掘調査例も北東方向に集中する傾向があり、これらの状況から中道遺跡周辺の千曲川左岸沖積地上における古代の集落は中道遺跡Ⅱの北東地域周辺を境とし、片貝川が流れる南・西方向に向かって消滅または減少し、逆に千曲川が流れる北・東方向に広く形成されていくものと考えられる。

遺物

本遺跡からは縄文時代から古墳時代の遺物が出土した。縄文土器は2条の縦位沈線の区画内に斜行沈線を施す縄文時代中期後葉の土器と思われるが、出土は2片と僅かである。弥生式土器は器形の全体を伺えるものは出土せず、すべて小破片である。口縁・体部外面に櫛描波状文、頸部外面に櫛描簾状文、一部の土器に赤色塗彩が認められ、弥生時代後期の特徴を有する。古墳時代になると資料が増加することから本遺跡の北東において平成6年に発掘調査を行った寺添遺跡発掘調査報告書を参考に時期分類したい。

寺添遺跡では出土した土器を古墳時代後期（Ⅰ期）～奈良・平安時代（Ⅵ期）に分類し、Ⅰ期5世紀後半、Ⅱ期6世紀前半、Ⅲ期6世紀後半、Ⅳ期7世紀前半、Ⅴ期7世紀後半、Ⅵ期8世紀代に位置付けている。本遺跡では時期の確定ができ、遺物の状態が良好な住居址は5軒と僅かだが、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ期に分類可能であった。

Ⅰ期	H3・H7・H8	6世紀代	H6
Ⅱ期	H15	7世紀代	H10
Ⅲ期	該当なし	古墳時代	H4・H12・H16
Ⅳ期	H11	古墳以降	H1・H5・H9・H13
		不明	H2・H14
		弥生時代	H17

	环	鉢	高环	壺	小型甕	甕	
I	H3-1 H3-2 H3-3 H3-4 H8-1 H7-4 H7-5 H7-6	H8-2 H7-7	H3-5 H8-8	H3-7 H3-6	H8-7	H3-8 H7-9 H7-8	H8-3 H8-4 H8-5 H8-6
II	H15-1 H15-6 H15-2	H15-3 H15-4				H15-8 H15-7	
III							
IV	H11-1						
						H11-2 H11-3	

第50图 中道遺跡Ⅱ土器編年表(古墳時代)



中道遺跡Ⅱ遠景（西から）



中道遺跡Ⅱ全景（南から）H9年度調査区



中道遺跡Ⅱ近景（西から）H9年度調査区



中道遺跡Ⅱ全景（垂直）H9年度調査区



中道遺跡Ⅱ全景（南東から）H11年度調査区



中道遺跡Ⅱ全景（南から）H13年度調査区



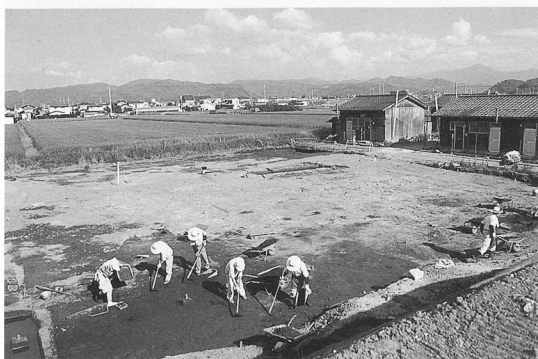
H 9 年度調査風景



H 9 年度調査風景



H11年度調査風景



H11年度調査風景



H13年度調査風景



H 1 号住居址全景（西から）



H 1 号住居址カマド（西から）



H 1 号住居址掘方（西から）



H 2 号住居址全景（南から）



H 2 号住居址掘方（南から）



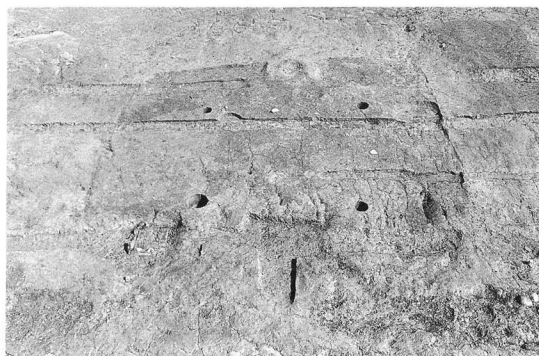
H 3号住居址全景（南から）



H 3号住居址遺物出土状況



H 3号住居址掘方（南から）



H 4号住居址全景（南から）



H 4号住居址カマド（南から）



H 4 号住居址カマド掘方（南から）



H 4 号住居址掘方（南から）



H 5 号住居址全景（南から） H 9 年度調査分



H 5 号住居址掘方（南から） H 9 年度調査分



H 5 号住居址全景（東から） H 11 年度調査分



H 5 号住居址掘方（西から） H 11 年度調査分